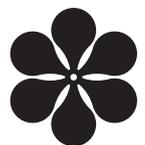


札幌市立大学

教員研究紹介

2021



札幌市立大学  
SAPPORO CITY UNIVERSITY

札幌市立大学

教員研究紹介

2021

札幌市立大学はデザインと看護の2学部、2研究科、助産学専攻科を設置し、「人間重視」と「地域社会への貢献」を基本理念に掲げ、デザインと看護の特色を活かした教育・研究・社会貢献活動に取り組んでいます。本冊子は産学官金連携・地域連携等にさらに積極的に取り組むため、多くの方々に本学教員の最新の研究事例をご紹介することを目的に発行いたしました。札幌市立大学教員の研究活動に関心を持っていただければ幸いです。

## 1. デザイン学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
1	人間空間デザイン	教授	齊藤 雅也	札幌市円山動物園 オランウータン屋内放飼場の熱・空気環境のデザイン研究	1
2	人間空間デザイン	教授	椎野 亜紀夫	身近な地域の自然の魅力を再発見する教育プログラム構築	1
3	人間空間デザイン	教授	西川 忠	臨床建築学のススメ ～建築物のケガと病気～	2
4	人間空間デザイン	教授	山田 良	風景と空間デザイン	2
5	人間空間デザイン	准教授	大島 卓	札幌市駒岡小学校屋上緑化施設の施工時植栽種および植物出現種の実態調査	3
6	人間空間デザイン	准教授	金子 晋也	地域資源としての北海道の木造文化	3
7	人間空間デザイン	准教授	小林 重人	ゲーミングの力で自分たちが望む未来をつくる	4
8	人間空間デザイン	准教授	小宮 加容子	「さわって楽しむ」遊びのデザインに関する研究	4
9	人間空間デザイン	准教授	武田 巨明	地域学校協働活動プロジェクトデザイン	5
10	人間空間デザイン	准教授	森 朋子	歴史・文化・自然を活かした都市デザインに関する研究	5
11	人間空間デザイン	准教授	山田 信博	公営住宅の福祉的利活用に関する研究	6
12	人間空間デザイン	講師	石田 勝也	極限環境下におけるデータの取得とその美的表現の実践	6
13	人間空間デザイン	講師	片山 めぐみ	コミュニティマネジメントと住民の交流実態からみた「多世代共生住宅」の可能性	7
14	人間空間デザイン	講師	須之内 元洋	文化資産の継承のためのデジタルアーカイブの設計	7
15	人間情報デザイン	教授	細谷 多聞	可変的な触覚刺激を提供する玩具の開発	8
16	人間情報デザイン	教授	石井 雅博	人間特性の解明とそのデザイン応用	8
17	人間情報デザイン	教授	安齋 利典	遠隔授業におけるグループワークの実践：(例)ブレインライティング	9
18	人間情報デザイン	教授	柿山 浩一郎	COVID-19 感染拡大に伴う大学教育の遠隔化	9
19	人間情報デザイン	教授	藤木 淳	非接触で体験可能なインタラクティブアート表現	10
20	人間情報デザイン	教授	三谷 篤史	看護基礎技術教育のための口腔ケアシミュレーションモデルの開発	10
21	人間情報デザイン	教授	若林 尚樹	落書きコミュニケーションによる視覚的対話を活用したデザインプロセスの研究	11
22	人間情報デザイン	准教授	金 秀敏	「甘さ」に着目したマルチモーダル知覚情報の「干渉構造」解明に関する実証研究	11
23	人間情報デザイン	准教授	張 浦華	セラミック作品装飾効果の研究と作品制作	12
24	人間情報デザイン	准教授	横溝 賢	生活世界に親しむ社会実践型デザインリサーチの試み	12
25	人間情報デザイン	講師	大淵 一博	授業協力から発展した地域貢献	13

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
26	人間情報デザイン	講師	福田 大年	オンラインの協創で生成される学び場	13
27	人間情報デザイン	講師	松永 康佑	正二十面体を用いた色合わせ立体パズルゲームの設計	14
28	人間情報デザイン	助教	矢久保 空遥	「柔らかさ」に着目した感性の神経基盤解明の試み	14
29	共通教育	教授	松井 美穂	アメリカ南部文学研究	15
30	共通教育	准教授	並木 翔太郎	形式と意味のミスマッチ：“足し算”の挑戦	15
31	共通教育	准教授	丸山 洋平	人口移動の影響に着目した地域指標の客観的解釈～フィクションのストーリーを作り出さないために～	16

## 2. 看護学部

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
32	基礎看護学領域	教授	定廣 和香子	バーチャル国際看護学会で病院アートの研究を発表しました	17
33	基礎看護学領域	教授	樋之津 淳子	大学と医療施設の協働による看護師の遠隔会議システムを用いた継続教育の効果	17
34	基礎看護学領域	准教授	檜山 明子	転倒予防看護に関する研究	18
35	基礎看護学領域	講師	武富 貴久子	大学-病院の協働による学習コミュニティ形成への取り組み	18
36	基礎看護学領域	助手	高橋 葉子	NICUに勤務する看護職の看護技術について	19
37	看護管理学領域	教授	佐藤 ひとみ	看護のデータを情報化する	19
38	看護管理学領域	講師	矢野 祐美子	看護管理者の継続学習支援	20
39	看護管理学領域	助教	鬼塚 美玲	地震災害時の病院における災害看護活動に関する研究	20
40	小児看護学領域	教授	松浦 和代	乳児虐待リスク予測システム（仮称）の構築に向けた基礎調査	21
41	小児看護学領域	助教	牧田 靖子	乳幼児の「窒息」事故の実態と事故予防対策	21
42	母性看護学領域	教授	荒木 奈緒	胎児異常を診断された女性への助産師の支援	22
43	母性看護学領域	講師	黒田 紀子	NICUから退院する児とその家族がより笑顔で生活するために	22
44	母性看護学領域	講師	山本 真由美	客観的能力試験「新生児観察」項目の評価者間の一致度から教育方法を考える	23
45	母性看護学領域	講師	石引 かすみ	助産師教育におけるプロジェクト学習の実際と意義	23
46	母性看護学領域	助教	大友 舞	妊娠初期における女性の口腔内自覚症状と関連要因の分析	24
47	成人看護学領域	教授	川村 三希子	認知症高齢がん患者の痛みのマネジメントに対する看護師教育プログラムの開発	24

No	専門分野	職位	氏名	研究課題名	頁
48	成人看護学領域	教授	卯野木 健	集中治療を受けた患者の集中治療後症候群に関する研究	25
49	成人看護学領域	教授	小田 和美	生活習慣病とともに生きる人とその家族への効果的な援助方法に関する研究	25
50	成人看護学領域	准教授	神島 滋子	高齢者のサルコペニア・フレイルの実態	26
51	成人看護学領域	准教授	菅原 美樹	クリティカルケア看護専門看護師の直接ケアコンピテンシー評価指標の開発	26
52	成人看護学領域	准教授	藤井 瑞恵	血液透析を受ける患者の心理的課題	27
53	成人看護学領域	講師	工藤 京子	災害が難病患者・障がい者に与える影響と備えについて	27
54	成人看護学領域	助教	栗原 知己	集中治療室に入院する患者様の入院中から社会復帰までを支える看護を考える	28
55	成人看護学領域	助教	齋 若奈	進行がん患者の希望を支えるアドバンス・ケア・プランニングに関する研究	28
56	成人看護学領域	助教	平山 憲吾	①化学療法に伴う皮膚障害とQoLに関する研究 ②高齢がん患者の化学療法継続における意思決定に関する研究	29
57	老年看護学領域	教授	貝谷 敏子	高齢者の脆弱な皮膚に対する効率性の高いスキンケアマネジメント方法の構築	29
58	老年看護学領域	准教授	村松 真澄	口腔ケア、食支援についての教育教材開発に関する研究	30
59	老年看護学領域	講師	原井 美佳	寒冷な特別豪雪地帯の高齢者に対する健康啓発プログラムの開発	30
60	老年看護学領域	助教	中田 亜由美	高齢者と同じ地域の住民が支え合う健康支援基盤構築に関する研究	31
61	精神看護学領域	准教授	守村 洋	メンタルヘルスに関する研究	31
62	精神看護学領域	講師	伊東 健太郎	精神看護学シミュレーション教育におけるSP養成の検討	32
63	精神看護学領域	助教	渋谷 友紀	人間中心設計プロセスの教育への応用に関する研究	32
64	在宅看護学領域	教授	菊地 ひろみ	明日の在宅看護を担う新卒訪問ナース育成の取り組み	33
65	在宅看護学領域	講師	高橋 奈美	ALS患者と家族が自宅で生活を続けることを支える診断から終末期までの支援の検討	33
66	在宅看護学領域	助教	坂本 結城	「生活」の概念分析-生活学および関連分野に焦点をあてて-	34
67	地域看護学領域	教授	喜多 歳子	子どもの貧困対策に関する地域保健活動	34
68	地域看護学領域	准教授	本田 光	あらゆる世代における“地域とのつながり”	35
69	地域看護学領域	助教	市戸 優人	思春期の子どもをもつ親の“家庭内性教育”に関する研究	35
70	地域看護学領域	助教	近藤 圭子	地域在住高齢者の健康に関する研究	36
71	地域看護学領域	助教	田仲 里江	WEB会議システムによる大学と施設をつないだ中堅看護師研修の学びの様相 -参加者へのインタビューから-	36

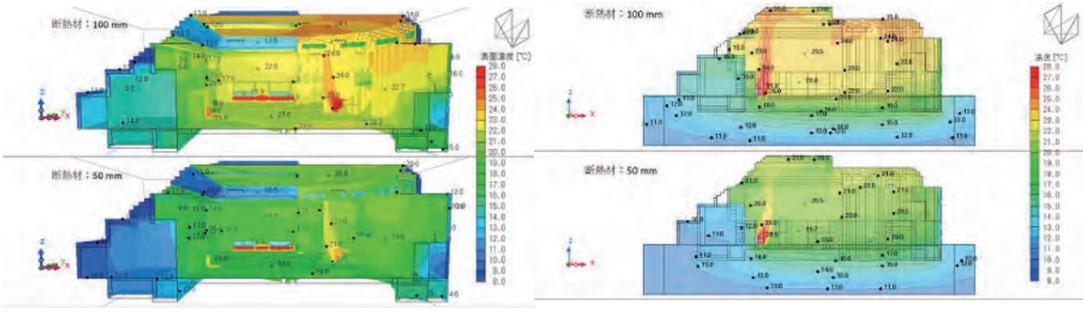
2021.4.1 現在

## 1. デザイン学部

**齊藤 雅也** 教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）  
SAITO Masaya キーワード：動物園デザイン、オランウータン、熱環境、空気環境、建築環境デザイン

**札幌市円山動物園 オランウータン屋内放飼場の熱・空気環境のデザイン研究**

【研究の概要】  
札幌市円山動物園に建設予定の「オランウータン屋内放飼場（仮称）」の熱・空気環境を数値流体解析によって予測し、設計条件を明らかにした。外断熱工法（外壁断熱厚 100 mm）と放射暖房を採用し、COVID-19 感染防止対応としての必要換気量（30m<sup>3</sup>/（h・人））を確保しつつ、生息地に近い室内気候を再現できることがわかった。  
下図（左）：表面温度分布、（右）：空気温度分布（上：断熱厚 100 mm（採用案）、下：断熱厚 50 mm の場合）。冬季（札幌）の外気温 -5℃ で、放飼場の平均放射温度（左上）、平均室温（右上）は 22～25℃ を維持し、散水によって高温多湿気候を再現できる。



解析結果（コンター図、表面温度）      解析結果（コンター図、温度）

**椎野 亜紀夫** 教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）  
SHIINO Akio キーワード：こども、遊び、自然環境、連携授業、フィールドワーク

**身近な地域の自然の魅力を再発見する教育プログラム構築**

【研究の概要】  
札幌市立大学デザイン学部が立地する南区芸術の森地区は自然性が豊かな地域であるが、地域に居住する児童は必ずしもその魅力に十分な気づきを得られていないのではないかと問題意識のもと、身近な自然の魅力を伝える教育プログラムの構築を地元の小学校教諭とともに総合的な学習の時間を活用して実践・検証した。マツ類の球果（マツボックリ）のエソリスによる食痕がエビフライにそっくりであることや、カツラの落葉は含有物質（マルトール）によりわたあめの香りを発するなど、五感を使った体験を通じて効果的な自然資源の気づき、再発見を促す授業実行ができた。2021 年度 4 月から札幌市立芸術の森小学校が本学芸術の森キャンパスに近い場所に新設され、2021 年度も引き続き連携授業を継続実施する。



西川 忠

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

NISHIKAWA Tadashi

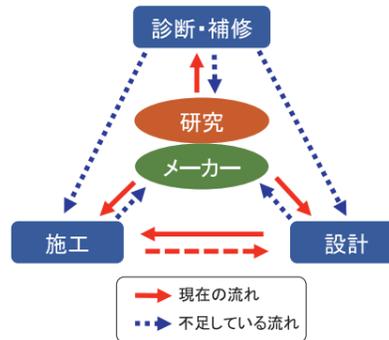
キーワード：既存建築物、補修・補強・長寿命化、臨床建築学

### 臨床建築学のススメ ～建築物のケガと病気～

#### 【研究の概要】

建物も使ってゆく間に、経年劣化したり地震などの自然災害に遭うことがあります。そのため、建築物を安全に永く使うためには、点検・調査診断が不可欠です。

建築物の調査診断は人の医療に例えられることが多く、実際、非破壊検査技術や検査プロセスなど共通するものも少なくありません。しかし、人の医療と比べると技術面・システム面で大きく遅れていると言わざるを得ず、見習って応用すべき点が多くあります。また、建築分野では、大学やメーカーから現場（臨床）への一方的な情報発信に留まっていることが多く、人の医療と違って現場（臨床）から研究へのフィードバックがうまく行われていない状況にあります。人の医療技術や仕組みの優れた部分を取り込んで、建築物の一層の安全・長寿命化を図るための技術開発や・仕組みづくりを行っていきます。



建築病院診察案内	
<b>内科</b>	鉄筋コンクリートの組織が壊れてゆく… ◇コンクリートの老化 中性化 ◇コンクリートのガン アルカリシリカ反応 ◇塩分の取りすぎ 塩害 ◇脆弱体質 低品質のコンクリート ◇筋無力症 鉄筋の腐食
<b>外科・皮膚科</b>	躯体を守っている外皮が壊れてゆく… ◇ひび、あかぎれ 心び割れ、外壁劣化 ◇かさつき、擦りむき 剥離・剥落、外装劣化 ◇外皮の剥離 漏水 ◇コンクリートの凍傷 凍害 ◇コンクリートのやけど 火害 ◇薬品アレルギー 化学的腐食
<b>整形外科</b>	耐震性不足、構造的欠陥 ◇骨粗しょう症 強度不足 ◇からだの柔軟性低下 粘り強さの不足 ◇先天的な異常 施工不良、低品質材料
<b>循環器・呼吸器科</b>	上下水道、電気、空調、動力、空気 ◇動脈硬化 配管の腐食 ◇心臓機能の低下 機器の摩耗・性能低下 ◇神経痛 漏電 ◇アレルギー 室内空気室、有害物質

大島 卓

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

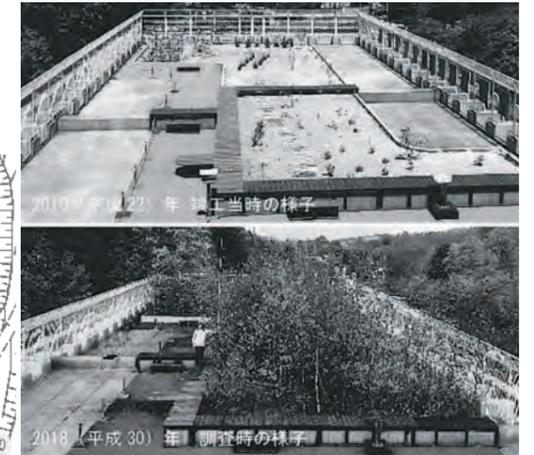
OSHIMA Makoto

キーワード：ランドスケープデザイン、牧場景観、地域再生、産業遺産の動態保全

### 札幌市駒岡小学校屋上緑化施設の施工時植栽種および植物出現種の実態調査

#### 【研究の概要】

2010（平成22）年の施工後、約10年が経過した札幌市立駒岡小学校の屋上緑化施設を対象とし、植栽環境の実態調査を実施した。主として竣工当時の植栽種の生育状況の確認、約10年間の植栽環境の経年変化について調査した。調査の結果、竣工当時の植栽種の生育状況や、植栽種以外の出現植物種（シラカンパ、ヤナギ類など）の存在・生育状況が明らかになった。



山田 良

教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

YAMADA Ryo

キーワード：建築意匠・デザイン、現代美術、環境芸術

### 風景と空間デザイン

#### 【研究の概要】



建築デザイン・環境デザイン・空間に係る作品の制作および研究。

上：《Arctic Installation》2017  
空間インスタレーション  
（ノルウェー・ボードー）

中：《海拔ゼロメートル／石狩低地帯》  
2016  
空間インスタレーション  
（北海道立近代美術館）

下：《107 mパビリオン》2018  
空間インスタレーション  
（札幌市）

金子 晋也

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

KANEKO Shinya

キーワード：木造住宅、近現代建築、架構、類型学

### 地域資源としての北海道の木造文化

#### 【研究の概要】

本研究課題は、北海道における木造建築や家具、インテリアなど木造文化の広がりやデザイン学の視点から研究することで、地域資源の掘り起こしを目的としている。このような視点から、科研若手（B）採択課題「寒冷地の住宅建築の活用実態と変容過程に関する研究」、科研基盤研究（C）採択課題「北海道沿岸部における木造建築に関する研究」を行っている。また、「札幌市の西2丁目地下歩道の賑わいを目的としたストリートファニチャー」では、道産の木材を活用したベンチのデザインを実施した。



小林 重人 准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）  
 KOBAYASHI Shigeto キーワード：ソーシャルデザイン、進化経済学、複雑系科学、社会シミュレーション、知識科学

ゲーミングの力で自分たちが望む未来をつくる

【研究の概要】  
 考え方や立場が異なる人たちが共通の知識基盤を形成して話し合うことができる「ゲーミング」と呼ばれるシミュレーションゲームの開発と運用を行っています。合意形成やシステムデザインのためのツールとして実際の現場で活用されています。

発行数を伸ばしているデジタル通貨の使用法を理解し、それが地域社会においてどのように活用することができるかを実践的に考えることのできるオンラインゲームの開発を行っています。コロナ禍におけるアナログ通貨のやり取りには感染リスクが伴いますが、デジタル通貨であればオンライン決済も簡単であり、決済アプリと紐付けた商品情報の発信も可能になります。開発したゲームではデジタル通貨の利便性をオンライン上で複数の匿名プレイヤーと一緒に体験し、ゲームを通じて地域経済をどのように発展させていくのかを空間を超えて相互に理解することができます。

今後は一般向けに実施することで、地域社会におけるデジタル通貨の役割について理解を深めてもらうことや、子ども向けに実施することでデジタル時代における金融リテラシーを身につけてもらうことを予定しています。



武田 巨明 准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）  
 TAKEDA Nobuaki キーワード：地域学校協働活動、プロジェクト型学習、地域連携、地域教育力、環境教育

地域学校協働活動プロジェクトデザイン

【研究の概要】  
 学校を核とした地域活性化を目指して、社会に開かれた教育課程、地域学校協働活動プロジェクトデザインとクリエイティブ人材育成のための場の構築および効果的な教育実践方法の開発に取り組んでいる。2020年度は、社会の変化により教育の内容や教育方法に変化を求められる中、絶滅が危惧されるツルコケモモのクローン栽培成功（道総研）を機に、新しい教育の実現のためツルコケモモの活用可能性および教育現場への導入方法の調査・検討を行なった。

学校教育での現状を整理した上で、今後求められる教育のあり方からみて、ツルコケモモの教材等としての活用可能性について検討し、その実施に向けての方法についてまとめた。

道立総合研究機構でクローン栽培方法、赤平オーキッド社で無菌試験管等の栽培方法の調査、意見交換を行なった。美唄湿原の生息状況調査、ニセコ鏡沼で生息状況調査および意見交換を行なった。ラテラ社で改良土壌開発について調査、意見交換を行なった。料理研究者によるレシピ開発、調理方法実験を行なった。小中学校での教育状況調査および教育方法の現状と課題の調査を行なった。その上で、ツルコケモモの教育現場での活用可能性と導入方法の検討を行なった。

今後は、市民団体や自治体、教育委員会、学校、企業、農協などと協働して環境に関するSDG'sプロジェクトの実践段階へ進めていく計画である。

小宮 加容子 准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）  
 KOMIYA Kayoko キーワード：キッズデザイン、ユニバーサルデザイン

「さわって楽しむ」遊びのデザインに関する研究

【研究の概要】  
 人間の成長において、五感の中でも特に「触覚」は早い時期から発達している。そのため、赤ちゃんは指で触る、口に入れてなめるなど触覚を使って、そのモノが何であるのか、自分の行動に対してどのような反応をするのか確かめながら、自分の身の回りの世界を理解していく。しかし、触覚刺激が過敏な子どもは、本来は遊びを通して触覚から得ることができる多くの情報を、成長の過程で上手く得ることができず、周囲への適応が一層難しくなる。

そこで、本研究では「さわって楽しむ遊び」を実践的にしながら、そこで得た結果をいかした「子どもが能動的に触る経験を重ねることを支援する玩具」の開発を目指す。

しかし、2020年度は、実践的な研究活動が難しかったため、過去に実施した遊びの結果から、「さわる」に関する分析を中心に研究を進めた。その結果より、「ざらざら」「冷たい」などの違いによって差があるものの、どの年齢の子どもも「触覚」の違いを区別していることが分かった。引き続き、分析を進めていく。



「さわって楽しむ遊び」の様子  
 2019年12月

森 朋子 准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）  
 MORI Tomoko キーワード：都市デザイン、歴史的環境保全、文化的景観、都市形成史

歴史・文化・自然を活かした都市デザインに関する研究

【研究の概要】  
 本学に着任して3年が経ちました。都市計画を専門とする私にとって、初めて暮らす都市・札幌はとても魅力的で、昨年からは札幌の都市形成に関する研究を始めました。冬季オリンピック招致計画の変遷から、当時の都市像が浮かび上がってきます。今後も、札幌の都市形成の歴史を様々な視点で見ていこうと思っています。

都市デザインとは、一つの建築が群となった建築群で構成された空間、いわゆる町並み景観を対象とします。そこは、多く人が関係する空間であり、その空間が持つアイデンティティをいかに守っていくかなどは、意見交換や議論が必要です。都市・地域が活かすべき個性とは何か、都市景観に関する専門家として、都市のデザインを、ひいてはまちづくりを正しい方向に導く一助となればと研究を行っています。



第5回冬季大会競技施設等配置計画図<sup>1)</sup>

図出典 1) 永井松三編：[第十二回オリンピック東京大会組織委員会] 報告書（下巻）、1939.1.15

山田 信博

准教授 デザイン学部（人間空間デザインコース）

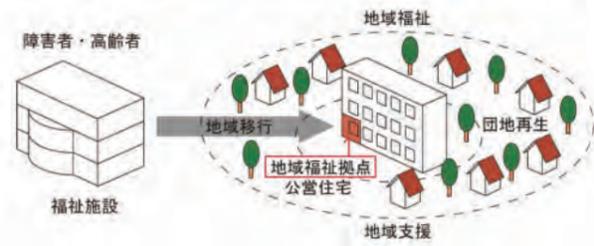
YAMADA Nobuhiro

キーワード：公営住宅、地域福祉、既存利活用

### 公営住宅の福祉的利活用に関する研究

#### 【研究の概要】

#### 公営住宅の「住戸」に設置された福祉活動拠点を対象



福祉施設の地域移行、団地再生、地域支援などの問題を背景として

公営住宅の福祉的利活用の有効性や問題を明らかにする

公営住宅の既存住戸を福祉的に利活用した事例を研究対象としています。これまで住居のみの使用に限られていましたが、法改正により高齢者や地域のために利用することができるようになりました。地域福祉が進められていることもあり、グループホームやこどもを支援する団体が主に活用しています。既存の部屋を使用していることもあり、多くの利点があります。

石田 勝也

講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

ISHIDA Katsuya

キーワード：メディアアート、環境情報、データロギング

### 極限環境下におけるデータの取得とその美的表現の実践

#### 【研究の概要】

地球環境の悪化は目を追うごとに進み、世界的な問題として取り上げられることは日常のこととなっています。その一方で、自然環境とは隔離された都市環境で生活を行っている都市生活者は、微細な自然環境の変化を認知できなくなっている現状があります。我々都市生活者が、日々悪化する自然環境を認知するためにはどのようなことをするべきなのか。これまでの研究ではこの環境の情報をいかに自らの手で取得し、その情報を元にどのように表現に用いるかを実践してきました。はじめは高高度の環境についての調査を行いました。データ取得可能な装置を組み込んだ成層圏気球を飛ばし、気球から送られる情報を音響映像のパフォーマンスとして表現しました。



次に、寒冷地である札幌の環境をテーマに、極寒環境でも動作するデータ取得装置の制作、除雪・排雪で稼働する除雪車などの情報を使用した美術展を開催しました。高高度、極寒環境と続いた環境情報の取得を今年度は深海の環境にまで広げ、人間の認知不可能な環境での情報と表現の可能性を探るプロジェクトを進めています。

<https://siaflab.jp/wic2021/>

片山 めぐみ

講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

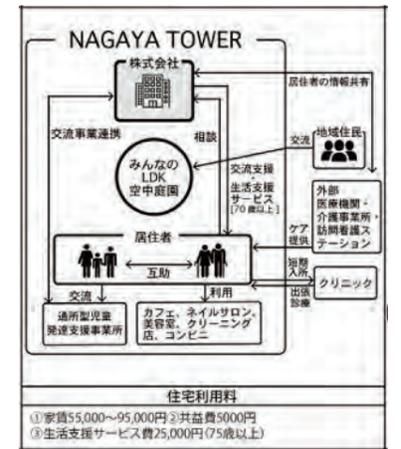
KATAYAMA Megumi

キーワード：コミュニティ、マネジメント、交流、多世代共生、互助

### コミュニティマネジメントと住民の交流実態からみた「多世代共生住宅」の可能性

#### 【研究の概要】

“人生 100 年時代”の政策として多世代共生住宅が注目されている。全国の多世代共生住宅 36 件における互助を生み出すコミュニティマネジメント、および居住者同士の互助のなかで高齢者の見守りや看取りを促す仕組みについて調査した。多世代共生を謳って建設された集合住宅でもコミュニティマネジメントがない物件は半数に及び、高齢になり所定の役割を果たすことが難しくなった住人が退去を要請される場合が多いことが分かった。住民が感じている多世代共生の意義として、「新しい生活スタイル・価値観の獲得」「社会的役割の獲得」「安心・信頼関係の獲得」が挙げられた。設置者による媒介型のコミュニティマネジメントや、協議体型のマネジメントの主体として高齢者住宅の居住者の参加が求められている。また、身体を使った家事を役割とすることや認知機能が低下した人がコミュニティで果たしうる役割、死を迎える人がそばにいる意義など、高齢者のコミュニティでの役割を議論する必要があることが分かった。



多世代共生住宅の事例

須之内 元洋

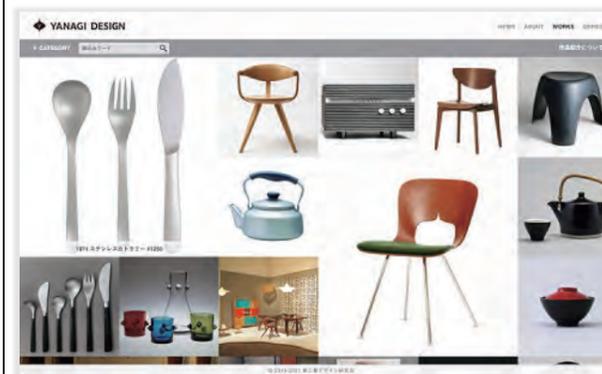
講師 デザイン学部（人間空間デザインコース）

SUNOUCHI Motohiro

キーワード：デジタル・アーカイブ、メディアデザイン

### 文化資産の継承のためのデジタルアーカイブの設計

#### 【研究の概要】



近年、組織や企業が、自ら育んできた文化資産をデジタル化し、組織の未来のために利活用しようとする試みが各所で試みられている。アーカイブ情報学とメディアデザインの知見を参照しながら、そうした活動を支援している。

例えば、2020年に公開された柳宗理の作品アーカイブでは、柳氏の代表的な作品が網羅され、高精細な写真と解説とともにスムーズに閲覧することができる。今後も、公開作品の充実化や、詳細な年表の制作などを通じて、柳宗理氏のデザインを多角的に理解することができ、デザイン資産の継承と発展に寄与できるアーカイブを目指す予定である。このように、様々な分野のアーカイブ運用者と継続的に議論を重ねながら、アーカイブの運用や公開方法等について提案・設計・開発を行っている。

このように、様々な分野のアーカイブ運用者と継続的に議論を重ねながら、アーカイブの運用や公開方法等について提案・設計・開発を行っている。

細谷 多聞

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

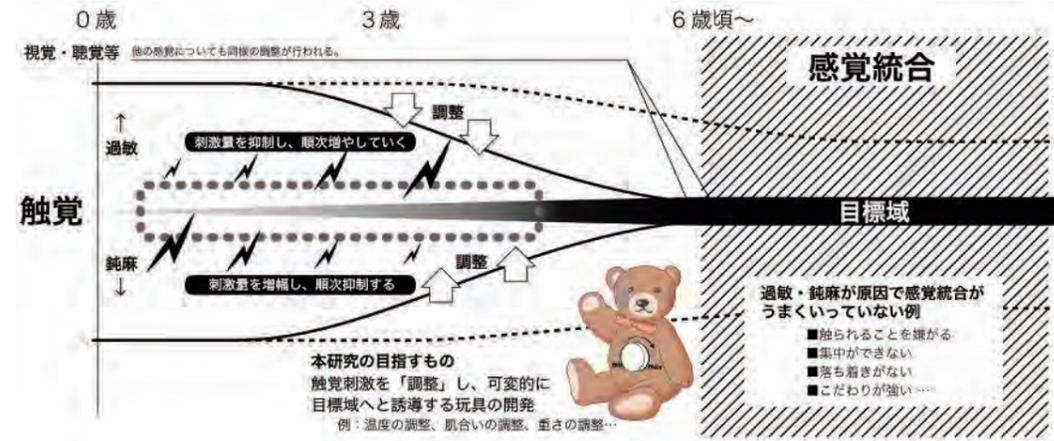
HOSOYA Tamon

キーワード：プロダクトデザイン、感覚統合、玩具デザイン、触覚

### 可変的な触覚刺激を提供する玩具の開発

#### 【研究の概要】

本研究では、ヒトが0歳から幼児期にかけて「触覚」のダイナミックレンジを安定的に取得できるように玩具のデザイン開発を行っています。研究の成果は、触覚をはじめとする各感覚の感覚統合を安定化し、こどもの健やかな成長を促すことが期待できます。



安齋 利典

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

ANZAI Toshinori

キーワード：遠隔授業、グループワーク

### 遠隔授業におけるグループワークの実践：(例)ブレインライティング

#### 【研究の概要】

授業のオンライン化に関する研究を実施。Microsoft Teams のファイル共有機能を使い、PowerPoint をテンプレートとしてグループワークを試行し、可能であることがわかった。以降、ブレインストーミング、ブレインライティング、カスタージャーニーマップ、プロジェクトマネジメントにおける WBS、サービスブループリント、ビジネスモデルキャンバス等をオンラインのワークショップで実現した。ブレインライティングの事例を下に示す。

- ① PPT テンプレート作成
- ② チームにグループのチャンネル追加
- ③ グループのチャンネルにテンプレートをアップ
- ④ 授業チャンネルで手法を説明
- ⑤ 各自のカードのテンプレートの取り扱いを説明
- ⑥ 各チャンネルに分かれて作業
- ⑦ 教員が各チャンネルに入って状況把握
- ⑧ 授業チャンネルに戻って説明やまとめ



石井 雅博

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

ISHII Masahiro

キーワード：人間情報、知覚・認知、デザイン心理、情報技術

### 人間特性の解明とそのデザイン応用

#### 【研究の概要】

良いデザインを実現するには、受け手であることを熟知する必要があります。人間の知覚、認知、感性、運動、行動などの特性を学術的な方法で解明するとともに、根拠に基づくデザインをするための研究を行っています。また情報工学を応用人間のしたものづくりを行い、豊かで安心な社会や生活の実現のため、新たな価値や仕組みを創造していきたいと考えています。

柿山 浩一郎

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

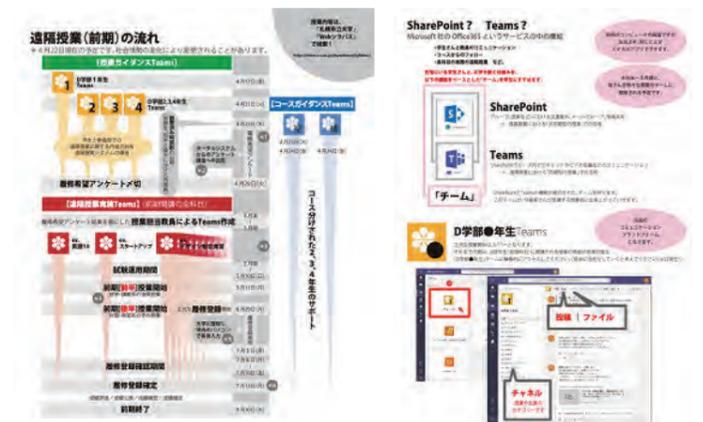
KAKIYAMA Koichiro

キーワード：遠隔授業、教育システム、マニュアル、システム設計、システム運用

### COVID-19 感染拡大に伴う大学教育の遠隔化

#### 【研究の概要】

新型コロナウイルス感染症(COVID 19)の感染拡大を受け、2020年3月末に大学教育の遠隔化が突如求められた。本学教員と事務局職員、ゼミ所属学生と共に試行錯誤を行い、Microsoft Teams (と SharePoint) を基軸とした札幌市立大学 デザイン学部の遠隔授業の仕組みを構築した。システムの設計に加え、実際にスムーズな遠隔授業運営が行えるよう、学内教員、非常勤講師、学生向けのマニュアルを、新たな教育に対する考え方の共有が可能となることも見据え作成し、ガイダンス(説明会)を実施した。また、一部対面で実施する授業に備えた学内での人の流れが記録できる仕組みや、学生の感染症対策に関する意識向上のための行動変容を促すコンペの実施などを行った。



藤木 淳

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

FUJIKI Jun

キーワード：非接触、体験、インタラクティブ、アート

### 非接触で体験可能なインタラクティブアート表現

#### 【研究の概要】

コロナ禍にある近年において、物に触れるという行為は感染のリスクを上げてしまいます。一方で、アートは人間の心を豊かにするものであり、自粛生活によるストレス軽減に繋がることが期待されます。特に、インタラクティブアートと呼ばれる、体験者の振る舞いに応じて変化するアート作品は、健康促進にも繋がると考えます。そこで、本研究では非接触で体験可能なインタラクティブアート表現をテーマとして、作品制作を通して表現の模索を行っています。具体的に制作した作品の例として、『オンとオフ』という作品では、体験者がスクリーンの前でジェスチャーをすると、スクリーンの夜空に色が塗られ、塗られた箇所から星が光り出します。更に、星が集まれば集まるほど、スクリーンの手前に置かれた、窓に見立てたライトオブジェクトが消えていきます。このように、『オンとオフ』は、体験者が体を動かしながら、星と家の灯りの関係を再考する機会を与える作品となっています。このような作品を札幌市芸術の森美術館などで展示し、多くの人に体験してもらっています。



『オンとオフ』

三谷 篤史

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

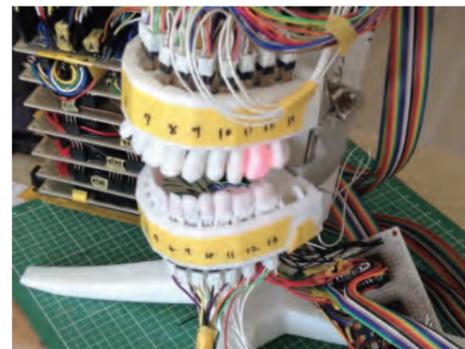
MITANI Atsushi

キーワード：メカトロニクス、センシング、ロボティクス、シミュレータ開発インタラクション

### 看護基礎技術教育のための口腔ケアシミュレーションモデルの開発

#### 【研究の概要】

医療や看護・介護における学習者・新人従事者の教育プロセスとして、シミュレーション教育が注目を浴びています。シミュレーション教育は、患者や患部を模したシミュレーションモデルを活用して、ケアの手順や基礎的手技を学習する教養プロセスであり、アメリカなどでは臨地実習に赴く前に必ず受講することが求められています。本研究では、このシミュレーション教育の重要性に着目し、口腔ケアに関する基礎技術学習を可能にする口腔ケアシミュレーションモデルを開発しています。日本における死因の第3位である肺炎は、50%が口腔内の菌が肺に移動して生じる誤嚥性（ごえんせい）肺炎であり、口腔内の菌を除去し清潔に保つ口腔ケアは重要なスキルです。臨地実習では、実際の患者さんを対象とした勉強ができる機会ですが、COVID-19 禍の状況下ではそれが困難な場合があります。その点からも、患者さんを模したシミュレーションモデルと、それを活用したシミュレーション教育環境の整備が急務であり、そのための研究を看護学部の先生や歯学の先生、現場の専門職従事者や時には患者さんと共に邁進しています。



若林 尚樹

教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

WAKABAYASHI Naoki

キーワード：視覚的対話、落書き、ワークショップ、気持ち温度計、印象評価

### 落書きコミュニケーションによる視覚的対話を活用したデザインプロセスの研究

#### 【研究の概要】

落書きコミュニケーションは視覚的対話手法のひとつとして研究開発している。デザイン思考プロセスをより効果的なものにするため、手書きによる対話やアイデアの視覚化をきっかけとしてグループワークによるクリエイティブなコミュニケーションを活性化しようとする手法である。

その活用として株式会社AIRDOとの連携授業では、「航空機のより快適でスムーズな利用のためのサービスデザイン」をテーマに学生10名が参加し、テーマに沿った具体的な提案を行なった。その成果は札幌市内のギャラリーで開催したゼミ展で公開した。また、オーディオテクニカと連携した「アナログって何？」プロジェクトでは、参加した学生10名が企画やデザイン制作を行い、3月に学生も参加して実施した次世代型オンラインワークショップでは、220名を超える参加があるなど、地域産業の振興にも貢献することができた。



金 秀敬

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

KIM SuKyoung

キーワード：感性価値、検証モデル、情報干渉

### 「甘さ」に着目したマルチモーダル知覚情報の「干渉構造」解明に関する実証研究

#### 【研究の概要】

本研究は、申請者が研究活動スタート支援研究(H28～29 課題番号:16HO7097)で実証・提案した評価モデル(以下、「マルチモーダル干渉構造モデル」と称する)の高度化を目的とする。先行研究により「マルチモーダル干渉構造モデル」では、「感覚器間・内の知覚情報一致可否(図1)」および「親近感(馴染みがもたらす情動)」が評価へどのように「干渉」するかについて明らかにした研究成果を踏まえ、本研究(若手研究、RO～現在、課題番号:19K20619)では、感覚器「間」の情報一致可否のみならず、感覚器「内」の情報一致可否(図2)および「親近感」が、例えば感性価値の強化あるいは緩和につながるのか、また強化や緩和が評価にどのように影響を与えるか(=干渉するか)を明確にするための検証実験を行なっている。



図1 嗅覚刺激と視覚刺激の一致可否が評価に及ぼす影響に関する検証 (=感覚器「間」の情報一致可否による正・負の効果検証)

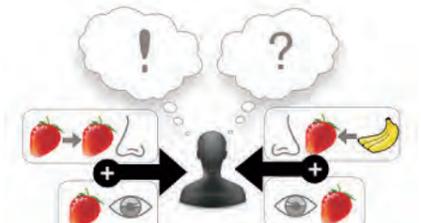


図2 複数の嗅覚情報の一致可否が視覚認知に及ぼす影響に関する検証 (=感覚器「内」の情報一致可否による正・負の効果検証)

張 浦華

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

ZHANG Puhua

キーワード：セラミックデザイン、装飾技法、金彩

### セラミック作品装飾効果の研究と作品制作

#### 【研究の概要】

1. 下絵具と釉薬施しの表現方法についての研究試作（図1テストピース）
2. セラミック作品制作（図2下絵具と金彩茶碗）
3. 北海道陶芸会オンライン展示作品（図3花器）

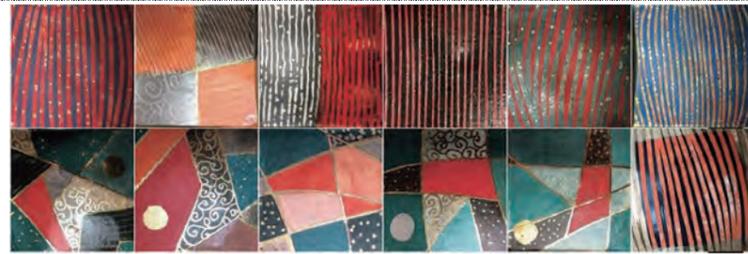


図1 テストピース



図3 花器



図2 下絵具と金彩茶碗

横溝 賢

准教授 デザイン学部（人間情報デザインコース）

YOKOMIZO Ken

キーワード：ビジュアルコミュニケーションデザイン、情報デザイン、共創、ワークショップデザイン

### 生活世界に親しむ社会実践型デザインリサーチの試み

【研究の概要】本年度、私の研究室では、札幌市内の障がい者小規模作業所にて製造される北海道産昆布加工品のパッケージデザイン開発にむけた生産現場のデザインリサーチをおこないました。依頼してきたのは札幌市内・80箇所の障がい者小規模作業所の連絡協議を支援する「NPO 法人 さっされん」さんです。関連作業所の事業者が、デザインの外注時に適切な指示を出すことができず、現在のデザインに不満を抱いていたことが依頼の背景にありました。そこで私の研究室では昆布が育てられるところから、加工製品になるまでの物語りを見える化し、加工業者が自らの言葉で扱う昆布の魅力を語るようになるためのデザインリサーチをおこないました。リサーチでは昆布漁の現場である厚岸と様似町に向き、話を聞き、実際に拾い昆布や干場作業を手伝う活動をしました。昆布漁の営みに実際にかかわることから、良い昆布を生み出す漁師さんの知恵と技や昆布の色艶・質感を体験的にリサーチしました。私たちは現場での学びとともに、北海道産昆布の魅力や価値情報を体系的整理し、4つのパッケージデザイン案を制作しました（右図）。一連の開発プロセスは事業者が参照できるよう、デザインリサーチブックとしてまとめられ、関連事業者に社会実践をベースとしたデザインリサーチ方法について解説しました。



大淵 一博

講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

OHBUCHI Kazuhiro

キーワード：地域貢献、産官学連携、学生参加

### 授業協力から発展した地域貢献

#### 【研究の概要】

本学は地域貢献を使命とし、教職員・学生が一体となって様々な形で地域と関わりを持っていきます。2020年度は以下のような取り組みを通して、地域に貢献しました。

南区地域振興課には、「南区のブランディング」をテーマとしたデザイン学部2年次開講の授業に参加いただきました。この授業で提出されたデザインをもとに、南区をPRするグッズのデザインを制作し、南区が主催するイベント等に参加された市民の皆様に無料で配布しました。また、南区内各地で開催されている冬のイベント「南区冬の雪あかり2021」を告知するフライヤーや、広報さっぽろ南区版ページのヘッダデザインを手掛けました。これらの事業を通じて、「芸術という切り口で南区をPRする」という趣旨のもと、デザイン・アートのつながりを市民の皆様に伝えていくことができたと思います。

これらの授業には本学の学生が積極的に関わっており、学生が授業以外の取り組みにも参加することで、多くの社会経験を積むことができるという教育的な効果も得られています。



福田 大年

講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

FUKUDA Hirotooshi

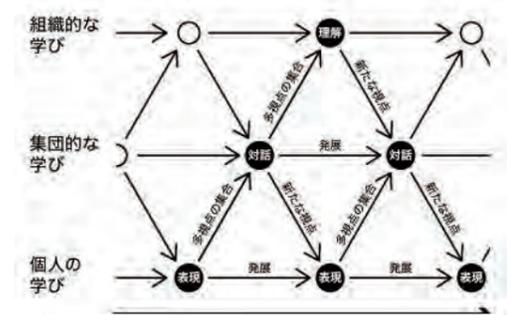
キーワード：協創、ファシリテーション、相互学習、教育、質的研究

### オンラインの協創で生成される学び場

#### 【研究の概要】

私は、市民のみなさんが多様な考え方を尊重しながら、面白いアイデアを考えたり、面白い何かをつくったりする協働的な創造活動（協創）が、これからの時代に大切だと考えています。

2020年度は、COVID-19の感染拡大によって、ほとんどの授業がオンライン実施となりました。そこでオンラインでグループ活動をする授業の参加者らの活動を分析して、オンラインの協創の意義や役割を考えてみました。その結果、参加者らは、個人、集団、組織を行き来する中で様々な視点に出会い、新しい視点を獲得し、学びを深める「多視点を活かした学びのレイヤー（図）」を、対面の時以上に構築していることが分かりました。この活動で気づいたことは、協創を支える手法の開発に活かせると考えています。



図：多視点を活かした学びのレイヤー

松永 康佑

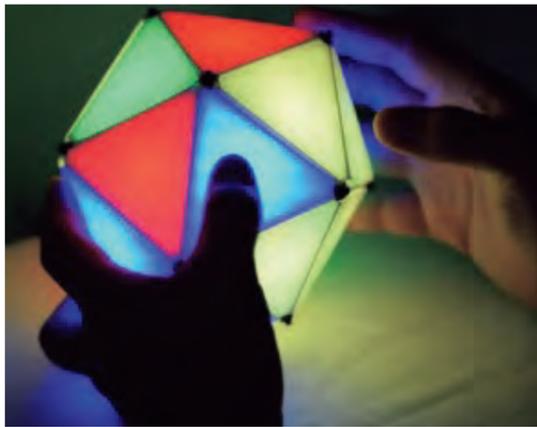
講師 デザイン学部（人間情報デザインコース）

MATSUNAGA Kosuke

キーワード：コンピュータグラフィックス、仮想身体、インタラクティブアート、ゲーム

### 正二十面体を用いた色合わせ立体パズルゲームの設計

#### 【研究の概要】



映像表現分野を中心に研究・表現を行っています。四角いモニターの枠を超え、球面をディスプレイとした、パズルゲームを制作しました。正二十面体の各面を色により定義し、頂点に配置したスイッチ操作によって、同色の面で五角形を作ることが目的となっています。

現在、知財化を見据えた改良版の設計を進めており、小型化、省電力化を含めた、新設計のパズルゲームを提案いたします。

松井 美穂

教授 デザイン学部（共通教育）

MATSUI Miho

キーワード：アメリカ南部文学、ウィリアム・フォークナー、カーソン・マッカーズ、ジェンダー、セクシュアリティ、人種

### アメリカ南部文学研究

#### 【研究の概要】

アメリカ南部文学、特に南部ルネサンス期(1920~50年代)の文学を中心に研究しています。作家としては、ノーベル賞作家でもあるウィリアム・フォークナー、女性作家ユードラ・ウェルティ、カーソン・マッカーズなどを研究しています。南部社会は家父長制と人種差別を基盤とした社会



ミシシッピ大学  
Center for the Study of Southern Culture

であり、人種、ジェンダー、セクシュアリティといった要素が社会システム自体のみならず、その社会の個人個人のアイデンティティと深く関わっています。そのような歴史的・社会的・文化的背景をもった南部の作家がどのように「南部とは何か」ということを、その文学的営為において探求したのかを考察することが研究の目的です。ここ数年は特に、アメリカにおける Black Lives Matter 運動の高まりを受けて、白人女性作家としてマッカーズやウェルティが南部の人種問題をどのように描いてきたかに関心を持って研究しています。

矢久保 空遥

助教 デザイン学部（人間情報デザインコース）

YAKUBO Takanobu

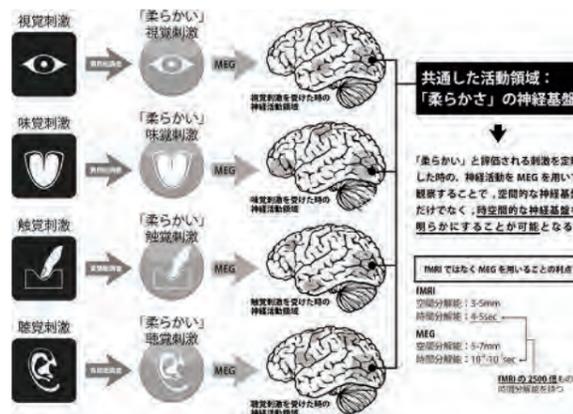
キーワード：共感覚的比喩、通様相性現象、聴覚

### 「柔らかさ」に着目した感性の神経基盤解明の試み

#### 【研究の概要】

人工知能技術が高まる近年において、人間が抱く複雑な感性の発現メカニズムを理解することへの関心は高まっているといえます。このような中、私は、聴覚・視覚・触覚・味覚など多様な感覚刺激に対して用いられる感性評価語について

研究を行ってきており、その中でも特に「柔らかさ」という感性評価語に着目して研究を行ってきています。「柔らかい」という感性評価語は本来、触覚刺激に対して用いられる感性評価語ですが、「柔らかい音色」「柔らかい色合い」「柔らかい味わい」など、多様な感覚刺激に対して用いられているという点で特徴的です。複数の感覚刺激においても発現する「柔らかさ」という感性を対象とし、視覚・聴覚・触覚・味覚的柔らかさを提示した時の脳神経活動を、比較的時分解能の高い MEG(脳磁図)で観察することによって感性の神経基盤解明を試みます。



並木 翔太郎

准教授 デザイン学部（共通教育）

NAMIKI Shotaro

キーワード：言語研究、意味の合成性、移動表現、動詞、前置詞

### 形式と意味のミスマッチ：“足し算”の挑戦

#### 【研究の概要】

私は、「ヒトが言語表現を理解する仕組み」について研究をしています。私の研究は、「言語表現の持つ意味は、その表現を構成する単語と文法の“足し算”の結果である（以下、「足し算理論）」という考え方にに基づきます。多くの言語表現は足し算理論で説明できますが、なかには厄介な表現もあります。例えば、[例文 1] *John walked in the room.* という表現は、①「ジョンが部屋の中で歩いた」という解釈のほか、②「ジョンが部屋に歩いて入った」という解釈が成り立つ場合があります。②の解釈は[例文 2] *John walked into the room.* から得られるもので、[例文 1]には to が無いため、足し算理論では ②の解釈が得られないことになってしまいます。前置詞 in が多義的で into の意味を持っていれば一件落着ですが、[例文 3] *John danced in the room.* に①タイプの解釈しかなく、[例文 4] *John danced into the room.* が自然な英語であることから、足し算理論では、[例文 1]の②の解釈、つまり、to の意味がどのように生じるのかを説明することが、重要な1つの挑戦になります。

私は、(1) to が表す“->”は“-”と“>”に本来分解されていること、walk などの一部の動詞には“-”の意味的要素が入っているため、in が表す場所の意味と足し算をすることで、擬似的な“->”ができていないと説明しました。“-”の有無は、その動詞の「道路を」という表現との相性で判定できます (OK 道路を歩いた / NG 道路を踊った)。

今後も、足し算理論の飽くなき挑戦は続いています。

丸山 洋平

准教授 デザイン学部（共通教育）

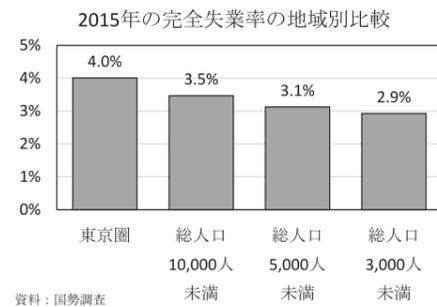
MARUYAMA Yohei

キーワード：人口移動、地域指標、人口減少・少子高齢化対策、統計の客観的解釈

### 人口移動の影響に着目した地域指標の客観的解釈 ～フィクションのストーリーを作り出さないために～

#### 【研究の概要】

21世紀は人口減少と少子高齢化の世紀であり、そうした人口現象は地域差を伴って進行することが確実である。各地方自治体は効果的な施策を展開するべく、自地域の状況を各種地域指標から把握しようと試みている。しかし、指標の地域差に対する解釈が一意的となる課題がある。図で示しているのは2015年国勢調査による地域別の完全失業率である。完全失業率は一般的に値が低いほど雇用が安定していると解釈され、プラスに評価される。しかし、図で示すように人口規模が小さい過疎的地域ほど完全失業率が低い。これは過疎的地域ほど雇用が安定しているのではなく、その逆に雇用機会が不十分なため、就業目的の人口流出が起こり、そうした人口移動が繰り返されたことで現在過疎状態になっていると考える方が妥当である。このように任意の時点におけるある人口状況は、過去に生じた人口移動による人口分布変動の結果として把握されることに留意する必要がある。すなわち、指標間の関連性への着目であり、それが十分でなければ客観性に乏しい解釈によって、地域の状況を都合よく解釈するフィクションのストーリーを作り出してしまふ。



## 2. 看護学部

定廣 和香子

教授 看護学部（基礎看護学領域）

SADAHIRO Wakako

キーワード：病院アート、国際看護学会、世界の看護師

### バーチャル国際看護学会で病院アートの研究を発表しました

#### 【研究の概要】

国際的な看護学の学会 Sigma Theta Tau International (STTI) は、2年ごとにヨーロッパカンファレンスを開いています。2020年度は、6月にポルトガルのコインブラで開催予定でしたが、新型コロナウイルス感染症 (COVID-19) の国際的流行 (パンデミック) により世界の看護師が集まることができなくなりました。

しかし、STTI ヨーロッパ支部は、少しもひるむことなく「私たちが、初めての看護学の国際バーチャルカンファレンスを成功させましょう！」というメッセージを発信し、世界の看護師が勇気づけられました。私もビデオ発表形式で病院アートについての研究を報告できました。

困難な時こそ、勇気を持って新しい方法を取り入れ問題を乗り越えていくことの大切さを学びました。まだまだ、不確実で不安な毎日が続いていますが、世界の看護師とつながりながら、病院アートの研究を進めていきたいと思っています。



樋之津 淳子

教授 看護学部（基礎看護学領域）

HINOTSU Atsuko

キーワード：継続教育、看護コンソーシアム

### 大学と医療施設の協働による看護師の遠隔会議システムを用いた継続教育の効果

#### 【研究の概要】

看護系大学と医療施設が連携・協働して看護専門職者の人材育成やキャリア支援を行う共同体である、看護コンソーシアム活動に取り組んでいる。看護師が大学などの基礎教育を終えた後、さらにステップアップするために受ける教育・研修を個々の施設で行うのではなく、大学の持つ人的、物理的リソースと複数の医療・福祉施設の連携・協働による横断的な取り組みが必要であると考えている。そこで中堅看護師ならびに副師長研修の支援事業にも新たに着手して、効果検証を行った。また、昨年度は COVID-19 への対策としてすべての研修を遠隔会議システムでつなぎ実施した。本研究は医療施設の教育担当者、受講した看護師からみた研修の効果について半構造的インタビューを行った。その結果、多施設の看護師同士が意見交換することで、初心に立ち返り、改めて日々の看護活動を意識する様子から、教育担当者は研修の効果を確認していたことがわかった。また、遠隔研修への参加者はほとんどが初めての経験であったが、回を重ねていく中で双方向性のディスカッションがスムーズとなり、遠隔研修であっても研修効果が非常に高く、満足度も高いことがわかった。

<p>檜山 明子 准教授 看護学部（基礎看護学領域）</p> <p>HIYAMA Akiko キーワード：転倒予防、リスクアセスメント、医療安全</p>
<p>転倒予防看護に関する研究</p>
<p>【研究の概要】</p> <p>転倒予防看護は、対象者の活動したいという思いを尊重しながら、より安全な行動ができるように生活全体を支援する必要がある。一方、安全性を重視しすぎることによって、対象者の活動能力の低下につながりうること、自由意思が尊重されない場合があることも問題である。健康寿命を延伸するためにも、活動性をいかに維持しつつ安全な暮らしができるかという課題は非常に重要であると考えている。</p> <p>転倒リスクを行動という目に見える形でとらえて、看護師とケアの対象者が相互に関係しながら、お互いの力を活用した転倒予防につながるように、研究を行っている。</p>
<pre> graph LR     A[文化・社会制度 外的・内的要因] --&gt; B(活動)     B --&gt; C(安全な行動)     C --&gt; D(活動能力向上 + 転倒予防)     E(看護師の関わり) --&gt; C   </pre>

<p>高橋 葉子 助手 看護学部（基礎看護学領域）</p> <p>TAKAHASHI Yoko キーワード：看護技術、新生児看護、ポジショニング</p>
<p>NICU に勤務する看護職の看護技術について</p>
<p>【研究の概要】</p> <p>看護師が実践するNICUに入院する新生児へのポジショニング技術の文献検討を行った。対象文献8件中6件で用具を使用しており、仰臥位・側臥位・腹臥位という一般的な体位がとられていた。ストレス兆候の減少や睡眠時間の延長等の効果があった。一方で、過度な筋緊張や同一姿勢の保持による頭部の平坦化等の異常が確認された。児の在胎週数や修正週数に応じた調整は行われていなかった。効果が得られたポジショニングの共通点は胎内環境に近い屈曲姿勢であり、用具を用いる場合には、児を囲い込むように頭部・体幹・四肢・臀部あるいは足底を用具に接触させていた。評価指標は多様であったが、注意相互作用系の評価はなかった。</p> <p>ポジショニングにより過度な筋緊張が生じることが明らかになったため、現在用いられている体位について再考する必要がある。また、看護師のアセスメントに基づく状況判断と適切な方法の選択により同一姿勢の保持に関連した影響を最小限に図る技術も求められる。児の発達を促すために、最適で心地よい環境の提供に向けて社会面からの評価も取り入れる必要がある。</p>

<p>武富 貴久子 講師 看護学部（基礎看護学領域）</p> <p>TAKETOMI Kikuko キーワード：継続教育、コンソーシアム、共同学習</p>
<p>大学-病院の協働による学習コミュニティ形成への取り組み</p>
<p>【研究の概要】</p> <p>臨床現場で働く看護師は、キャリアアップや研究活動の面から学習に対する意識が高く、そのニーズも大きい。しかし、学習の場は遠く、一方、大学教員もまた臨床から離れて教育活動を行っている。これまで本学は、病院との共同体である看護コンソーシアムを通じ、両者がつながる活動を続けてきた。大学そして病院からメンバーが集い、それぞれ異なる立場で看護を学びあうことができれば、コンソーシアムの活動目的である大学・社会の連携のなかで新たな学習コミュニティが形成されると考える。</p>

<p>佐藤 ひとみ 教授 看護学部（看護管理学領域）</p> <p>SATOH Hitomi キーワード：看護情報、看護管理、看護業務、病院情報、病院経営</p>
<p>看護のデータを情報化する</p>
<p>【研究の概要】</p> <p>「看護情報学」という分野は、日本ではまだ市民権を得ておりません。現在私は、数名の同分野のメンバーとともに、「看護情報学」という分野の教育内容を明示し、統一見解を出せるよう検討しております。</p> <p>看護は、健康問題を持つ患者さんの生活全般に対して、その方が自立できるよう、その方の生き方を全うできるように手助けしています。看護師はそのために患者さんを「知る」ということからかわりを開始し、病状がどのようなサインを示しているか等を日々観察し、手助けする行為に結びつけるための判断をしています。一口で言うと、この判断過程を「情報化」と言います。看護情報学は、この過程を電子化したり、コンピュータを活用して看護実践をより合理的に省力化できるようにすること、コンピュータに蓄えたデータを明日の看護に役立てるための利用について研究する学問です。</p> <p>この他、看護管理では看護師が生き生きと適切に患者ケアを行うには、どのような組織が適切か、人材育成、物品管理、時間管理、労務管理等のマネジメントについて研究しています。</p>

矢野 祐美子

講師 看護学部（看護管理学領域）

YANO Yumiko

キーワード：看護管理者、継続学習

### 看護管理者の継続学習支援

#### 【研究の概要】

日本では少子高齢化を背景に、医療の機能分化と地域連携が促進され、看護管理者には自施設のみならず、地域全体の将来を見据えて各々の施設の果たす役割を再定義し、管理実践を行っていくことが求められている。看護管理者が効果的に役割を発揮するには、看護管理に必要な情報の取得と継続学習が不可欠である。しかし、看護管理者の継続教育や研修の機会には病院規模によって差があることが指摘されている。また、物理的距離が大きい地域における継続学習の機会には、都市部とは異なる困難が伴う。そこで、病院規模や地域によらない看護管理者のための継続学習支援を構築することを目的に研究を行っている。



松浦 和代

教授 看護学部（小児看護学領域）

MATSUURA Kazuyo

キーワード：子ども虐待、乳児、虐待防止、リスク予測

### 乳児虐待リスク予測システム（仮称）の構築に向けた基礎調査

**【研究の概要】**  
私達小児看護学の教員は、社会保障審議会児童部会が毎年度報告している「子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について」に高い関心をもってしています。最新の第16次報告に至るまで、子ども虐待（心中以外）による死亡事例数には明らかな減少傾向が認められません。0歳児の死亡は全体の40%以上を占めています。  
私達は企業や他学と連携して、乳児期の虐待を周産期・新生児期から察知することのできる「乳児虐待予測システム（仮称）」の開発に取り組んでいます。  
この研究は、子ども虐待が発生後に対応するこれまでのシステムとは異なり、発生前の新生児期に着目して、早い時期からの親子支援につなげ、乳児虐待発生を未然に防止しようとする点に特色があります。

鬼塚 美玲

助教 看護学部（看護管理学領域）

ONITSUKA Mirei

キーワード：人的資源管理、ストレスマネジメント、看護管理、災害看護

### 地震災害時の病院における災害看護活動に関する研究

#### 【研究の概要】

日本では南海トラフ巨大地震など大地震が高確率で予想されており、地震災害への備えが喫緊の課題である。そのため、地震災害時の病院での災害看護活動に関する研究に取り組んでいる。今後取り組むべき研究上の課題を検討するため、2020年度に地震災害時の日本の病院における災害看護活動に関する文献検討を行った。

データベース医学中央雑誌 web を用い、キーワード「災害看護 and 地震 and 病院」で検索し、選定基準を満たす53文献を分析対象とした。分析の結果、文献数は2011年の東日本大震災以降に増加していた。研究内容は教育・訓練の効果検証（20）、地震災害時の看護職の行動や心情（17）、備えに対する看護職の実態（11）、組織的な備えの現状と課題（3）、看護職のストレス（2）に分類された。

災害への備えに関する研究が多く見られたものの様々な状況を想定したものは少なかった。地震発生地域や時期等によって被害様相は異なるため、起こりうる様々な状況を想定した研究が必要である。

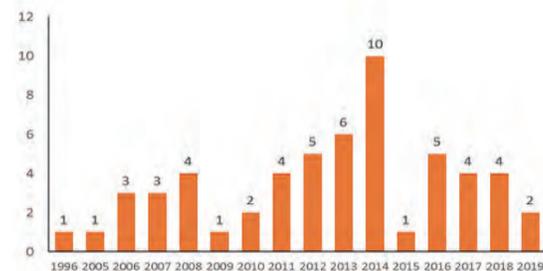


図1 文献数の推移

牧田 靖子

助教 看護学部（小児看護学領域）

MAKITA Yasuko

キーワード：窒息、乳幼児、事故予防対策

### 乳幼児の「窒息」事故の実態と事故予防対策

#### 【研究の概要】

厚生労働省人口動態統計によると、14歳以下の死因では「不慮の事故」が上位を占めています。種類別割合をみると、乳児では「窒息」が最も多いことが報告されています。乳幼児では、成長発達段階による興味・関心の対象の拡大、行動範囲の拡大、安全に対する意識の未熟性などによって、起こりやすい「窒息」事故には特徴があります。0歳児に柔らかい布団を使用しないこと、乳幼児では、乳歯が生えつつ食事形態の段階をあげていくことなど、毎日の食事で誤飲・誤嚥等、窒息の危険性があります。1回/月の育児相談に行っていますが、その際には、57mm×32mm大きさのもの（トイレトーパーの芯くらいの大きさ）は乳幼児の誤飲しやすい大きさであること、これよりも小さい物は、1m以上の高さがある台に置くように指導しています。



[https://www.irasutoya.com/2017/05/blog-post\\_30.html](https://www.irasutoya.com/2017/05/blog-post_30.html)

荒木 奈緒

教授 看護学部（母性看護学領域）

ARAKI Nao

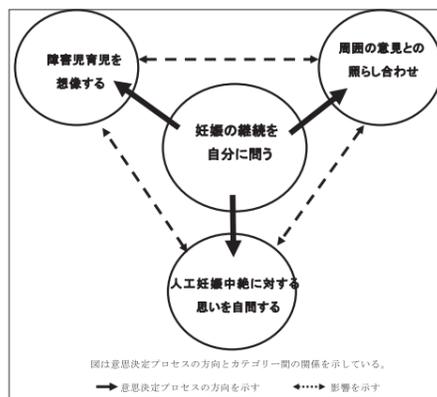
キーワード：胎児異常、妊婦、助産師

### 胎児異常を診断された女性への助産師の支援

#### 【研究の概要】

近年、産科領域において出生前診断技術が大きく前進し、様々な方法を用いて妊娠中に胎児の疾病を診断することが可能となった。妊娠中に胎児の形態異常、機能異常、染色体異常、遺伝性疾患を診断される妊婦は急速に増えることが予測され、胎児異常を診断された妊婦の支援体制の構築が急がれる。

しかし、当事者のみならず看護職の両者にコンセンサスの得られた具体的支援の方法論は未だ開発されていない。そこで本研究では、胎児異常を診断された妊婦や出産後にNICU入院となった新生児の母親と関わることの多い助産師をケアの専門家として位置づけ、専門家の同意の程度や対立する意見のすり合わせを行い、具体的支援内容のコンセンサスを形成することを目的とし調査を実施している。現在、全国1200施設にデルファイ法による調査を依頼し、154名の調査協力者を得ている。最終調査までの協力者は101名であり、回収されたアンケート調査結果の分析を進めている。



山本 真由美

講師 看護学部（母性看護学領域）

YAMAMOTO Mayumi

キーワード：助産技術、客観的能力試験、新生児観察、評価者

### 客観的能力試験「新生児観察」項目の評価者間の一致度から教育方法を考える

#### 【研究の概要】

助産師は母子および家族を支援する職種です。そのため、新生児の観察は重要な技術の一つといえ、例年助産学生は「新生児観察」の技術試験を受けます。しかし、その技術を指導する教員の評価が、一致しているか否かは大きな課題となります。「新生児観察」の評価項目は20項目あり、教員間の一致度を統計的に分析しました。一致度が低い項目は「呼吸観察」「心拍観察」「頸部観察」「安全な実施」の4項目でした。今後、さらに正確な技術が獲得できるよう指導するためには、上記4項目の評価基準を見直す必要があることが明らかになりました。



「新生児観察」の試験場面です（写真撮影は学生の許可を得ています。）

黒田 紀子

講師 看護学部（母性看護学領域）

KURODA Noriko

キーワード：新生児看護、NICU、退院支援、医療的ケア児

### NICUから退院する児とその家族がより笑顔で生活できるように

#### 【研究の概要】

NICUという、小さく生まれたり、何らかの事情で生まれてすぐに入院が必要になる赤ちゃんのための病棟があります。NICUに入院した赤ちゃんの中には、退院してから成長を見守ることが必要な場合や、人工呼吸器や酸素吸入器など、家庭でも何らかの医療器具を持ち帰って看護が必要な場合もあります。そのようなとき、NICUの看護師と、地域で働く訪問看護師が情報を伝えあい、協力しながら赤ちゃんとその家族を支援していく必要があると考えます。

そのために、私はNICUの看護師と地域で働く訪問看護師がよりスムーズに連携できる方法はないか、よりスムーズに協力し合い、家族が中心となる看護を提供するための研究を行っています。この研究をすることで、NICUから退院した赤ちゃんとその家族が、地域でより笑顔にあふれる生活ができることを願っています。

石引 かずみ

講師 看護学部（母性看護学領域）

ISHIBIKI Kazumi

キーワード：助産師教育、プロジェクト学習

### 助産師教育におけるプロジェクト学習の実際と意義

#### 【研究の概要】

A 大学助産学専攻科では、学生が「在学1年間という限られた期限の中でMY GOAL（自分自身が目指す助産師像に向けた専攻科終了時点での到達目標）を掲げ、その達成に向けて、学生自身が自己の課題を発見し、その課題解決に向けて主体的に取り組みながら学習を進めていくというプロジェクト」をベースとした学習（プロジェクト学習）を支援しています。このプロジェクトを通して、専門職として必須の能力とされている「自ら能動的に学ぶ力」を育むことを目指しています。本プロジェクトが学生の成長により寄与するものとなるための研究に取り組んでいます。



大友 舞

助教 看護学部（母性看護学領域）

OTOMO Mai

キーワード：妊娠期、口腔保健、つわり

### 妊娠初期における女性の口腔内自覚症状と関連要因の分析

#### 【研究の概要】

私は、妊娠 16 週未満の女性を対象とした口腔保健に関する調査を行っています。齲歯や歯周病は、糖尿病や心筋梗塞などの全身疾患との関連が明らかにされていますが、中でも周産期では、早産や低出生体重児のリスクとなることが報告されています。母子のよりよい健康を目指して、妊婦の口腔保健に関する調査を行っています。

妊娠して間もないころ、吐き気や嘔吐などといった「つわり」と呼ばれる消化器症状を自覚する妊婦さんが多くいます。吐き気や嘔吐により、胃酸が逆流し口腔内が酸性に傾くと齲歯にかかりやすくなると報告があります。妊娠期の中でも妊娠初期はつわりにより、口腔内の状態が悪化するのではないかと考え、妊娠初期にある女性を対象に口腔内の状態とつわりの程度、生活習慣との関連を調査しました。

調査結果は、口腔内に何らかの自覚症状がある妊婦は、「経産」、「睡眠を 9 時間以上とる」、「歯間ブラシやフロスを使用しない」という要因が関連していました。

妊娠する前からの口腔保健の重要性が明らかとなりました。引き続き、妊婦さんの口腔保健に関する調査をしていきます。

卯野木 健

教授 看護学部（成人看護学領域）

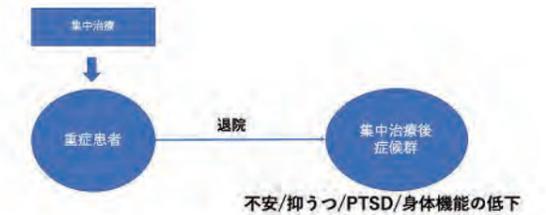
UNOKI Takeshi

キーワード：集中治療室、看護、集中治療後症候群

### 集中治療を受けた患者の集中治療後症候群に関する研究

#### 【研究の概要】

重篤な疾患や手術を受けた患者は、集中治療室に入室し、集中治療を受けることとなる。近年のこのような患者の生存率は、従来の生存率と比較して改善してきている。従来は、救命医療が優先であったが、近年は退院後の生活の質（QOL）が重要視されつつある。重症な患者の「その後」に関しては、あまりわかっていなかったが、近年、メンタルヘルスや身体機能に様々な障害を持つ患者が多いことが明らかになっている。例えば、うつ、不安、PTSD などや、認知機能障害や身体機能の低下などが存在することがわかっている。これらは、ほとんどが欧米のデータであり、日本におけるデータはほとんどないと言って良い。そこで、本研究では、日本でのこれらの症状の有病率を測定し、また、どのような方がこのような症状を持つのかを調査している。どのような方がこのような症状を持つのか明らかになれば、予測し、予防する手立てがあるかもしれない。このような研究を通じて、集中治療を受けた患者の、QOL の向上の援助に結びつけたいと考えている。



川村 三希子

教授 看護学部（成人看護学領域）

KAWAMURA Mikiko

キーワード：認知症、がん患者、QOL、疼痛マネジメント

### 認知症高齢がん患者の痛みのマネジメントに対する看護師教育プログラムの開発

#### 【研究の概要】



認知症の高齢がん患者さんは痛みがあっても 30 分前の痛かったことを忘れてしまいます。また、痛みをうまく伝えられないため、大声をあげたり落ち着かない行動をとったりします。そのため医療者は「痛みは感じていない」「認知症が進行した」と知識不足により誤解し痛みが治療されないままになっていることがあります。

認知症があっても、がんがあっても人が尊厳をもって自分らしくおだやかに過ごしていけるよう、日々の暮らしを支える役割を担う看護師に対し教育プログラムを作成しています。

小田 和美

教授 看護学部（成人看護学領域）

ODA Kazumi

キーワード：慢性期看護、生活習慣病、患者教育、セルフケア支援、外来看護

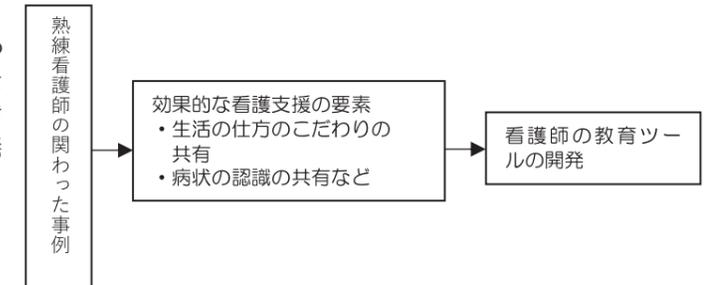
### 生活習慣病とともに生きる人とその家族への効果的な援助方法に関する研究

#### 【研究の概要】

生活習慣病を代表とする慢性の病気とともに生きる人々にとっては、日々の食事や運動などの生活の仕方そのものが病気の治療となります。どのような援助がこのような慢性の病気とともに生きる人々のやる気を促して、長年の生活習慣を変える手助けになるのか、効果的な援助方法についての共同研究を継続的に行ってきました。

これまで、療養上の望ましい変化をもたらした看護師の関わりとして、看護師と患者さんが生活の仕方のこだわりや病状についての認識をお互いに共有することが重要であることがわかってきました。

さらに、慢性病とともに生きる人々を生涯に渡って支援する方法を探求し、慢性病の人々を支援する看護職のための教育ツールの開発に発展させていきたいと考えています。



<p>神島 滋子 准教授 看護学部（成人看護学領域）</p> <p>KAMISHIMA Shigeko キーワード：リハビリテーション、リハ栄養、サルコペニア</p>
<p>高齢者のサルコペニア・フレイルの実態</p>
<p>【研究の概要】</p> <p>地域で生活している高齢者について身体計測と質問紙調査を行い、筋力や筋肉量の低下（サルコペニア）や脆弱性（フレイル）について調査しました。対象はサービス付き高齢者住宅（サ高）と老人クラブなどに通っている高齢者（在宅）でした。サルコペニアと思われた人はサ高で13名中5名、在宅は27名中14名でした。飲み込みの機能（口腔機能）が低下している人はサ高で2名、在宅1名でした。サ高では在宅に比べて、BMIが高く、脚力が弱く、握力も弱く、椅子からの片足での立ち上がりテストができた人が少なかったことが判りました。これらのことから身体を動かす機能を維持することが大切だと考えられました。</p>

<p>菅原 美樹 准教授 看護学部（成人看護学領域）</p> <p>SUGAWARA Miki キーワード：専門看護師、コンピテンシー、評価指標</p>
<p>クリティカルケア看護専門看護師の 直接ケアコンピテンシー評価指標の開発</p>
<p>【研究の概要】</p> <p>修正デルファイ法を用いて CCNS の直接ケアコンピテンシー評価指標を開発することを目的とした。調査票を用いて、デルファイラウンド1（1回目 Web 調査）、パネルミーティング、デルファイラウンド2（2回目 Web 調査）を実施した。対象は、第2研究の対象者に加え、CCNS とクリティカルケア看護専攻教育課程の教員をパネルメンバーとした。分析方法は、CCNS の直接ケアコンピテンシー評価指標の適切性と難易度について記述統計を行った。合意を示す同意率は、75%以上の同意率を合意の基準とした。</p> <p>結果、デルファイラウンド1では、コンピテンシーの適切性について、62項目中、6項目を除いたすべての項目でパネルメンバーの75%以上が「必須である」（7～9）と回答した。パネルミーティングでは、デルファイラウンド1の適切性評価で意見が分かれた6項目とそれ以外に修正を要する項目の有無について議論・修正した。デルファイラウンド2では、適切性は62項目すべての項目でパネルメンバーの90%以上が「必須である」と回答した。以上より、2回のデルファイ調査とパネルミーティングによって62項目のCCNSの直接ケアコンピテンシー評価指標の適切性が確認され、合意を得ることができ、評価指標として妥当であることが示された。</p>

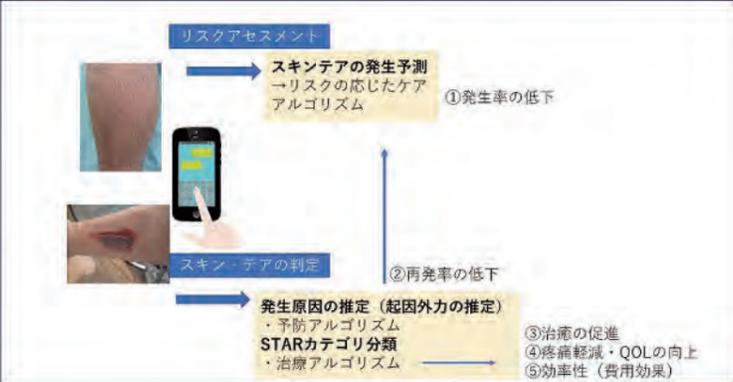
<p>藤井 瑞恵 准教授 看護学部（成人看護学領域）</p> <p>FUJII Mizue キーワード：血液透析、糖尿病、セルフケア、継続教育</p>
<p>血液透析を受ける患者の心理的課題</p>
<p>【研究の概要】</p> <p>血液透析患者における通院時間の長さや生命予後の関連が報告されています。また高齢透析患者の増加により、送迎などの通院支援の必要性が議論されています。加えて北海道では、広域かつ積雪寒冷地のため地域や季節に特化した通院の問題を抱えています。背景が複雑で実態も把握されていません。長時間通院者を「片道40分以上の時間を要し他市町村の施設まで通院する人」と定義し、その状況の把握と看護上の課題を明らかにするための調査を行いました。札幌圏と道東の都市部でインタビュー調査を実施しました。</p> <p>長時間通院は患者にとって生活時間の制約や経済的な影響があります。しかし住み慣れた土地で自分の望む生活を続けるための条件と捉え、生活を受け入れていました。一方で冬の降雪時期は、通院に不安や問題が生じているものの個人的に対処していました。透析療法は血液透析だけではなく、腹膜透析や腎臓移植もあります。治療法の選択を適切に行うことで、QOLが改善することもあり、治療法の選択への支援も今後の課題と考えています。</p>

<p>工藤 京子 講師 看護学部（成人看護学領域）</p> <p>KUDO Kyoko キーワード：災害、備え</p>
<p>災害が難病患者・障がい者に与える影響と備えについて</p>
<p>【研究の概要】</p> <p>2018年9月6日の胆振東部地震が難病患者や障害者等への影響を把握するために北海道難病連が同年11月に実施したアンケート調査結果を分析した。難病患者の中には医療機器を使用して在宅で生活している人がいる。具体的には電動ベッド、エアマット、吸引器、電動車椅子、介護リフト、酸素濃縮器、人工呼吸器、ネブライザー、湿度センサーマットなどである。北海道全域が停電したブラックアウトによって、このような器機が使えなくなっていた。特に呼吸器や酸素濃縮器などは命に関わるものであり、蓄電池など停電時の備えは急務である。また、電動ベッドや電動車椅子があることで一人暮らしをしている場合にもその影響が大きかった。停電で冷蔵保存していた血液製剤など薬剤への影響を答えていたのも特徴的であった。エレベーターが止まったことは、買い物や受診など外出に影響し、断水の水の確保に難渋していた。難病や障害があると2階であっても階段が使えなくなり、断水でトイレも使えなくなり、水を運ぶことについて困難が生じていた。今回の地震による停電は、より難病患者には影響が大きく、日頃の備えの重要性が示唆された。中には発電機やカーインバーターを備えていたり、水や食料を備蓄している人もいたが、災害用トイレという回答はなかった。人間にとって排泄は必ず毎日行われることであり、災害用トイレがあればトイレ用の水の確保は不要となることから、今後の備蓄リストの中にトイレという選択も入れていく必要があることが明らかになった。</p>

栗原 知己 KURIBARA Tomoki	助教 看護学部（成人看護学領域） キーワード：クリティカルケア、集中治療、人工呼吸管理、体外式膜型人工肺（ECMO）
集中治療室に入院する患者様の 入院中から社会復帰までを支える看護を考える	
<p>【研究の概要】 私の研究は、クリティカルケアと呼ばれる分野を対象にしています。クリティカルケアとは、生命の危機的状況にあり、主に集中治療室（ICU）と呼ばれる病室に入院する患者様を対象に行われる看護を指します。私はその中でも特に、重症な呼吸器疾患などによって人工呼吸器や、体外式膜型人工肺（ECMO）と呼ばれる医療機器を装着した患者様への看護を取り扱っています。これらの医療機器は患者様の生命を直接支える機器であり、看護師も専門的な知識や技術が必要です。しかし、科学的に明らかになっていないことも多く、現場の看護師は日々試行錯誤しながら看護を行っています。</p> <p>危機的状況にある患者様が安全に療養でき、早期に社会復帰するためには、ICUでの合併症予防や、早期回復を促すための看護など、ICUに入院されている間から患者様にとって適切な看護が提供されていることが重要です。そのような看護の発展に寄与するためにこの分野における研究を進め、病院で働かれている看護師の方々の看護が少しでも向上することで、患者様の療養生活に貢献したいと考えています。</p>	
	

齋 若奈 SAI Wakana	助教 看護学部（成人看護学領域） キーワード：がん看護、進行がん、薬物療法、意思決定
進行がん患者の希望を支える アドバンス・ケア・プランニングに関する研究	
<p>【研究の概要】 アドバンス・ケア・プランニングは患者の人生の最終段階における意思決定のアプローチとして推奨されています。進行がん患者は、延命とQOLを天秤にかけ、いつまで治療を続けるかといった複雑で困難な意思決定を迫られる特徴があります。進行がん患者に対して、治療の限界や限られた予後といった死を想起させる厳しい現実について伝えつつも、患者の希望を理解し、同時に希望を支えることが重要です。看護師には、患者の状況を察しながら心の機微を見極めて意図的に関わるという独自の役割があり、本邦の進行がん患者のアドバンス・ケア・プランニングにおいて非常に重要な存在です。</p> <p>現在、抗がん治療を受けている進行がん患者における希望とはどのようなものか、文献から検討を行っています。今後、この結果をもとに、看護師がどのように進行がん患者の希望を支えながらアドバンス・ケア・プランニングを実践しているか明らかにし、看護実践モデルの開発に取り組んでいきたいと考えています。</p>	

平山 憲吾 HIRAYAMA Kengo	助教 看護学部（成人看護学領域） キーワード：がん、化学療法、有害事象、意思決定、生活の質（Quality of Life : QoL）
① 化学療法に伴う皮膚障害と QoL に関する研究 ② 高齢がん患者の化学療法継続における意思決定に関する研究	
<p>【研究の概要】 ① がん患者の多くは化学療法（抗がん剤）を受けているが、様々な有害事象（副作用症状）が出現する。その一つである皮膚障害に着目しているが、皮膚障害である発疹や脱毛等は外見（アピアランス）における苦痛となり、患者の QoL を低下させる。これまでの研究成果として、治療を継続する期間は QoL の維持が難しく、特に症状が強く出現している場合には精神面に大きな影響を及ぼしていた。以上より、がん患者が皮膚障害に対して早期に対応できるように、アピアランスに関する情報ツールの開発に関する研究に取組む予定である。</p> <p>② 世界的に高齢者のがん対策の重要性が高まっているが、高齢がん患者に対する治療のエビデンスは確立していない。特に、治癒が望めない進行がんを抱えた高齢がん患者は、治療に伴う有害事象による苦痛に加え、加齢による諸臓器機能の低下などによって治療の継続に対する葛藤を抱いている。高齢者は意思決定の際、医療者に「お任せ」する傾向があることも示されているが、お任せのまま受けることによって、QoL を維持した生活を送れなくなる可能性もある。そこで、進行高齢がん患者が化学療法の継続を選択するまでのプロセスについて解明することによって、患者自身で意思決定が行えるような支援を検討したいと考えている。</p>	
	

貝谷 敏子 KAITANI Toshiko	教授 看護学部（老年看護学領域） キーワード：高齢看護学、スキンケア、看護政策・行政、医療経済学
高齢者の脆弱な皮膚に対する 効率性の高いスキンケアマネジメント方法の構築	
<p>【研究の概要】 スキントアは、皮膚粗鬆症の一つであり摩擦・すれによって、皮膚が裂けて生じる損傷である。高齢化に伴い、臨床ではこのような脆弱な皮膚の特徴を持つ対象者が増えている。一般病院で実施した縦断調査では、スキントアは平均 12.0（6.2）日で治癒し、適切なケアを行えば他の創傷に比較して早く治癒できることが明らかになった。しかし、過去にスキントアの既往のあった患者は 34.4%であり、治癒後の再発が高いことが課題であった。再発の予防には、損傷の原因となる起因外力を予測することが必要である。そのため、起因外力を推定可能なアプリを開発し、これによりスキントアの再発低下の一助となることを期待する。</p>	
	

村松 真澄 准教授 看護学部（老年看護学領域）  
MURAMATSU Masumi キーワード：口腔ケア、食支援、AI、シミュレーション教育、高齢者

口腔ケア、食支援についての教育教材開発に関する研究

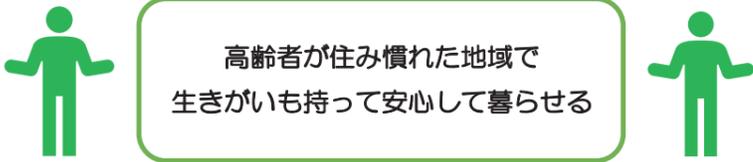
【研究の概要】  
デザイン学部の教員と口腔ケア、食支援に関する看護教育教材についての研究を展開しています。口腔ケア技術のシミュレータの開発や CG キャラクターを用いて口腔ケア・食支援技術の可視化を試みています。2020年はCOVID-19禍で、効果検証ができませんでした。これまで欧米のシミュレーションセンターなどを見学しました。今後は、企業との連携を実施し、製品化を目指したいといます。私の夢は、その教材が看護教育のみならず、介護教育や家族への支援にも活用できることで、人の幸せに貢献することです。




中田 亜由美 助教 看護学部（老年看護学領域）  
NAKATA Ayumi キーワード：高齢者、社会参加、生きがい、Age-Friendly Communities

高齢者と同じ地域の住民が支え合う健康支援基盤構築に関する研究

【研究の概要】  
高齢者が外出できなくなると、体力・筋力の低下、認知症の発症、持病の悪化、社会との接点の欠如などからくる心身への悪影響が懸念されます。私は、高齢者の外出困難要因を明確化する目的として、2014年9月～12月に北海道A地域において調査を行いました。その要因として、病気や障害、加齢に伴う身体機能の低下など身体的な要因や支援者がいないこと、冬の道路が滑るなどの環境的な要因、経済的負担などが明らかとなりました。そしてさらに、高齢者が外出困難という状況において、孤独感や不安が生じることが明らかとなりました。この研究をとおして、高齢者がどのような健康状態になっても身近なところで誰かと交流できたり、誰かの支えで楽しみのお出かけができたり、いつでも話せる気にかけてくれる人がいることで安心感が得られると良いのではないかと考えるようになりました。そこで、どのような健康状態でも高齢者が安心して住み慣れた地域で暮らせるように、高齢者と同じ地域の住民がお互いに支え合い、高齢者自身も生きがいや楽しみとなる活動を通じて支え合える地域づくりの実践的な研究を進めています。



高齢者が住み慣れた地域で  
生きがいも持って安心して暮らせる

原井 美佳 講師 看護学部（老年看護学領域）  
HARAI Mika キーワード：寒冷、特別豪雪地帯、高齢者、健康啓発プログラム

寒冷な特別豪雪地帯の高齢者に対する健康啓発プログラムの開発

【研究の概要】北海道A町の保健福祉課スタッフと一緒に、高齢者さんの健康維持に役立つようなプログラムを考えています。図のように取り組みを進めています。



第4段階 同じような環境にある町の高齢者の健康啓発プログラムに適用・応用できるように  
寒冷な特別豪雪地帯の高齢者に対する健康啓発プログラムの開発

第3段階 後半の実施（方法論の深化）  
（時期検討中）第5回いきいき健康塾  
（中止）2020年10月 第5回いきいき健康塾  
2019年11月 第4回いきいき健康塾

第2段階 前半の実施（方法論の確定）  
2018年10月 第3回いきいき健康塾  
2017年10月 第2回いきいき健康塾  
2016年9月 第1回いきいき健康塾

第1段階 対象の理解 2015年9月「健康と暮らしについての調査」

ポイント  
地方自治体職員と大学教員の協働  
プログラム  
体組成測定  
調理と昼食  
講話、体操など  
開催時間  
10時～14時  
開催の頻度  
毎年冬に1回

守村 洋 准教授 看護学部（精神看護学領域）  
MORIMURA Hiroshi キーワード：メンタルヘルス、自殺予防、シミュレーション教育、精神障害者地域支援、権利擁護

メンタルヘルスに関する研究

【研究の概要】  
“メンタルヘルス”と言っても幅広い内容の研究活動をしております。  
① うつ病・自殺予防；うつは15人に1人が発症する病気です。病気ですので気の持ちようでは治りません。確実に医療につながる事が重要です。特にうつになって自分の判断能力が低下して“死にたくなる”気持ちになることがあります。尊い命を守るため、うつ病や自殺予防の講演会など、高校生、一般市民、教職員を対象に実施しております。  
② 権利擁護；精神の病気になると通常の判断能力が損なうことが見られます。そのため、入院加療の必要性が理解できなかったり、地域での日常生活における金銭管理などが不十分だったりすることが生じます。それらに対して権利擁護を尊重しつつ、適切な医療、および、より良い地域生活を過ごすことができるよう支援をしております。  
③ COVID-19感染状況下におけるメンタルヘルスを維持・増進するための講演会（2021.1.23）を行いました。



自粛生活 楽観思考が大切  
コロナ禍 心の健康維持のコツは  
守村市立大准教授が講演

北海道新聞夕刊（2021.1.23）

伊東 健太郎

講師 看護学部（精神看護学領域）

ITO Kentaro

キーワード：精神看護、シミュレーション教育、SP

### 精神看護学シミュレーション教育におけるSP 養成の検討

#### 【研究の概要】

精神看護学領域では、模擬患者さん（以下SP）を用いたシミュレーション教育を行い、看護実践力向上のための教育方法を検討してきた。また、SPの皆様の演技力は、大変演技力が高く、学生が学習する上で大いに貢献をいただいている。

SPが精神に障がいを抱える患者を演じるにあたり、精神症状を呈する患者は、実際に患者の症状が目に見える訳ではない。病態や症状について演じることが、なかなか難しいという意見をいただいていた。そのため、SPには、精神に障害を抱える患者の理解を深めるために、研修を行い演技の向上を一緒に検討していくことにした。

SPは、病態や症状、苦悩などを理解して自分の演技を振り返る機会となった。そのため、演技力の向上と、設定状況に応じた多様な演技ができるように、研修で学習したことの活用を検討していた。

一方で、SPは、患者を演じる上での困難を感じていた。実際に患者とかかわる機会がないため、患者と関わった経験のなさによる現実的な演技の難しさや、患者の心理についての理解の難しさを感じていたため、今後は、研修内容に精神障害を抱える当事者の講演を導入し、よりリアリティのある演技ができるように検討をしたい。

以上から、SPに研修を行うことにより、精神に障がいをもつ患者について理解を深めることができ、SPの演技がさらにリアリティのあるものになると推察される。



菊地 ひろみ

教授 看護学部（在宅看護学領域）

KIKUCHI Hiromi

キーワード：訪問看護、新卒ナース、教育

### 明日の在宅看護を担う新卒訪問ナース育成の取り組み

#### 【研究の概要】

これからの在宅看護を担う新卒訪問ナースの育成に向けて、道内の大学の在宅教員と共に「新卒訪問ナースを応援する会（愛称：スタタン）」の活動をしています。今年度の「新人訪問ナース応援フォーラム」はWEB開催で、学生、訪問看護ステーション、行政関係者約100名が参加して盛会でした。新卒訪問ナースとして活躍しているスターさんの経験を聞くことができ、若い人のまっすぐな想いに感動しました。「新卒訪問看護師育成ガイドライン」の作成にも関わり、新卒訪問ナース育成の機運の高まりを実感しました。

卒業後間もないうちに、「生活を基盤とした看護」をしっかりと経験することは、看護の視座を養う大切な機会だと考えています。



渋谷 友紀

助教 看護学部（精神看護学領域）

SHIBUYA Yuki

キーワード：看護基礎教育、ケーススタディ、EBN、人間中心設計

### 人間中心設計プロセスの教育への応用に関する研究

#### 【研究概要】

多様な分野で活用されている人間中心設計/HCD：Human Centered Design(以下、HCD)を教育、特に教員の抱える課題解決に応用する研究です。

教育においては、教育の質を担保するためにPDCAサイクルを確立し、カリキュラムマネジメントが行われていますが、PDCAは業務を継続的に改善し、教育目標を効果的・効率的に達成することが可能になる一方で、指導内容と教育効果の媒体となる教員の存在が見えにくい構造となっています。本研究では、PDCAサイクルを効率的に回す上で教員自身が抱える課題解決にHCDプロセスを組み込み(図1)、教員の満足感や肯定的な経験価値を重視しながら問題解決を試みるものです。

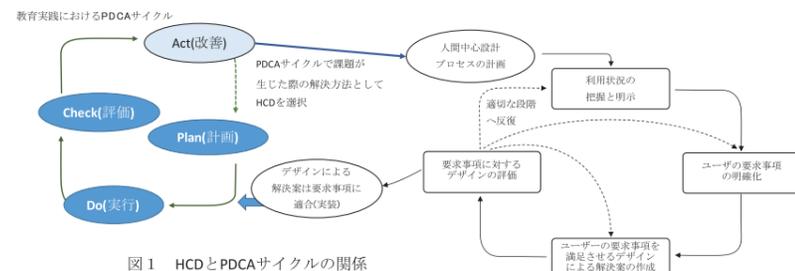


図1 HCDとPDCAサイクルの関係

高橋 奈美

講師 看護学部（在宅看護学領域）

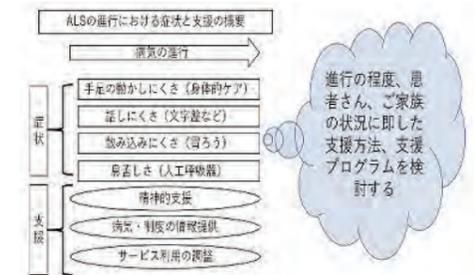
TAKAHASHI Nami

キーワード：筋萎縮性側索硬化症（ALS）、神経難病、家族、支援、在宅看護

### ALS患者と家族が自宅で生活を続けることを支える 診断から終末期までの支援の検討

#### 【研究の概要】

私が専門にしている在宅看護では、病気を持ちながらも住み慣れた自宅で安心・安全に療養できるための看護の方法や環境づくり、システムづくりを専門にしています。中でも私は、特に筋萎縮性側索硬化症（以下、ALS）患者とその家族への看護について研究をしています。ALSは、有効な治療法がなく、全身に障害がおよぶこと、徐々に進行しますが、進行を止める有効な治療法は確立されていないことから、診断をされると、患者さんはもちろんのこと、ご家族の人生、生活をも大きく変化させる疾患と言えます。時代とともに、様々なサービスが整備され利用しやすくなってはいるものの、居住地域において利用できるサービスの量、質は様々であり、また、高齢者の発症や子育て世代における発症など、ケアの方法を考える上でも、対象の多様性を踏まえることが重要です。住み慣れた自宅で安心・安全に療養するためには、患者さん、そしてご家族とともにケアすることが重要であることから、多様なご家族の状況を踏まえながら、どのようなケアが必要なのかを、患者さんやご家族へのインタビューを通して、丁寧に明らかにし、ケアシステムの構築に役立てたいと考えています。



坂本 結城	助教 看護学部（在宅看護学領域）
SAKAMOTO Yuki	キーワード：生活、概念分析、看護基礎教育
「生活」の概念分析 ―生活学および関連分野に焦点をあてて―	
<p>【研究の概要】</p> <p>看護職は「医療」と「生活」両方の視点を持って人を見る専門職です。</p> <p>看護基礎教育において、「医療」の視点については対象の健康や疾患、障害の基礎知識や治療、看護を体系的に学びます。一方で「生活」の視点については学問的知識として体系的に学ぶ機会がほとんどなく、学生個々が経験的に理解している日常用語としての「生活」をもとに授業が進んでいく現状があります。また、看護実践の場においても、看護職はそれぞれの経験をもとに「生活」支援を実践しています。つまり看護学における学問的知識としての「生活」は、いまだ明確になっていないと言えます。</p> <p>そのため、看護学における生活概念や生活構造を明確にすることを目的として、研究に取り組んでいます。生活学および看護学の関連分野における生活概念を分析した結果、生活の主体的側面、社会的側面、構造的側面をそれぞれ強調した定義を導出できました。今後はさらに定義を洗練し、看護基礎教育において「生活」とは何かを学ぶ際の学問的知識とすることを目指しています。</p>	

本田 光	准教授 看護学部（地域看護学領域）
HONDA Hikaru	キーワード：ソーシャルサポート、社会的孤立、地域とのつながり
あらゆる世代における“地域とのつながり”	
<p>【研究の概要】</p> <p>社会的孤立は公衆衛生の分野において、各国で研究が重ねられており、今や世界的な関心事の一つになっています。例えばイギリスでは孤独担当相が任命され、国策としてこの問題に向き合っています。社会的孤立は、精神的な抑うつ症状だけでなく、循環器疾患や高齢者のフレイルの進行にも影響があることが報告されています。また孤立の問題は、高齢者だけの問題ではなく、就学児童・生徒や成人期にある人々においても課題となっており、国際的にはホットな話題です。私は、この孤立の問題を「地域とのつながり」をキーワードにして、子育て、高齢者の見守りなどの地域課題に研究成果を応用したいと考えています。</p>	
	

喜多 歳子	教授 看護学部（地域看護学領域）
KITA Toshiko	キーワード：子どもの貧困、保健師、インタビュー、質的研究
子どもの貧困対策に関する地域保健活動	
<p>【研究の概要】</p> <p>本研究の最終的な目標は、乳幼児期の貧困による健康への悪影響を最小限にする公衆衛生看護活動を体系化することにある。平成30年度～平成31年度に実施した自治体保健師23名へのインタビュー調査の分析を行い、これまで研究成果を学会や研修会等で発表した。</p> <p>令和2年度は、地域の健康づくりに働きかける公衆衛生看護活動の分析から、地域住民との協働による「子どもの貧困対策」の方向性を検討した。</p> <p>保健師のインタビュー調査から明らかになったことは、地域住民でなければできない重要な役割として、【貧困世帯とそこで暮らす子どもたちを孤立させないこと】があげられていた。地域の人々の子どもに対する声かけや見守りはもちろん、地域のイベントや行事への誘い、「ふつう」の生活を実感・体験させる機会をつくること。それは、日常的に家族以外の大人と接することを通して、他者への信頼、人間関係におけるマナーや常識といった社会性を学ぶことにもつながり、地域の人材育成ともなり得ることを示唆していた。</p>	

市戸 優人	助教 看護学部（地域看護学領域）
ICHINOHE Yuto	キーワード：性教育、家庭、思春期保健、行動科学
思春期の子どもをもつ親の“家庭内性教育”に関する研究	
<p>【研究の概要】</p> <p>近年、家庭での性教育が注目され、多くの書籍が発刊されるなど、家庭内性教育のムーブメントが起こっています。子どもの性の健康を守るためには、学校だけでなく、家庭での性教育が重要とされています。しかし、国内の親の多くは、性教育を実施したい思いはあるものの、実施できていない現状があります。そこで、家庭内性教育に影響する要因について、高校生の子どもの親を対象にインタビュー調査を実施したところ、「親が子どもに性教育を行う覚悟」や「同世代の子どもを持つ親からの支援」、「親が性教育の方法を身につけること」などが性教育の実施に影響していることが明らかになりました。以上から、親が性教育を実施するためには、子どもの性の健康を守る公衆衛生の観点から支援を行う必要があると考えます。</p> <p>そこで、現在、調査研究で明らかになった影響要因に着目し、親が家庭内で自信を持って性教育が実施できるようになることを目指したプログラム開発に取り組んでいます。今年度中に開発プログラムの有効性を評価する介入研究を実施する予定です。</p>	
	

近藤 圭子

助教 看護学部（地域看護学領域）

KONDO Keiko

キーワード：高齢者の健康、自己効力感、地域医療、健康行動

### 地域在住高齢者の健康に関する研究

#### 【研究の概要】

高齢者の健康を保つことや、高齢者が自立した生活を送ることは、極めて重要な課題であり、豊かな生活を送り続けるためにも重要と考える。高齢者ができるだけ介護を必要とすることなく、自立した生活を送るためには、高齢者自身が健康に対する意識づけを高めることや、良い生活習慣の保持が重要であると考え、自己効力感、健康行動など高齢者のQOLに関連するさまざまな検討を行っている。地域の高齢者の自己効力感、健康行動や健康に対する意識についての研究を進め、地域で生活する高齢者の健康について検討している。また、地域医療の問題についても研究を進めており、地域医療の問題について住民の思いの実態把握、住民理解のためのアプローチ方法についての検討にも取り組んでいる。



田仲 里江

助教 看護学部（地域看護学領域）

TANAKA Rie

キーワード：コンソーシアム、キャリア教育、中堅看護師研修、WEB会議

### WEB会議システムによる大学と施設をつないだ中堅看護師研修の学びの様相 —参加者へのインタビューから—

#### 【研究の概要】

中堅看護師研修参加者の学びの様相を明らかにするために参加者へインタビュー調査を行った。中堅看護師研修は、研究者が科目責任者である健康教育指導法(看護学部3年次)の講義内容を撮影した動画視聴学習と他施設の参加者とのオンラインによるディスカッションで構成した。研修に参加し、研究協力が同意が得られた5施設20名の看護師を対象とし、グループインタビューを行った。研究者が所属する大学の倫理委員会の承認後に実施した。

分析の結果、《WEB会議によるディスカッションの有用性と戸惑い》、《健康行動理論の実践への活用の可能性の自覚と模索》、《大学の講義を活用した研修の効果と要望と学習意欲の向上》、《ディスカッションにより明らかになった他施設の看護師との実践の共有》、《地域へ広がる看護の継続性への気づき》の5カテゴリーに集約した。

研修参加者たちは、健康教育指導法で学んだ理論を実践と結びつけながら他施設の看護師とその学びの内容を共有し、患者を地域へつなげるという看護の継続性について学んでいたと考える。看護系大学と医療施設の連携・協働において、WEBで実施する研修という形態が1つの可能性であることが示唆された。

## 札幌市立大学 教員研究紹介 2021

編集 札幌市立大学地域連携研究センター

発行日 2021（令和3）年9月24日

発行 札幌市立大学地域連携研究センター

〒005-0864 札幌市南区芸術の森1丁目

TEL.011-592-2346

FAX.011-592-2369

<https://www.scu.ac.jp>

E-mail: [crc@scu.ac.jp](mailto:crc@scu.ac.jp)



[www.scu.ac.jp](http://www.scu.ac.jp)

札幌市立大学

SAPPORO CITY UNIVERSITY